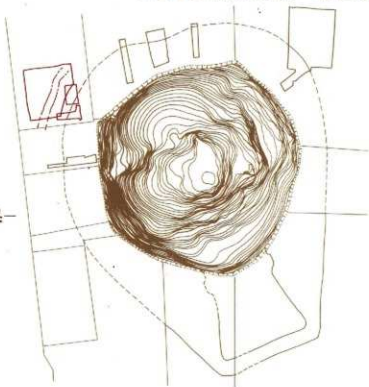


金津山古墳 発掘調査報告書

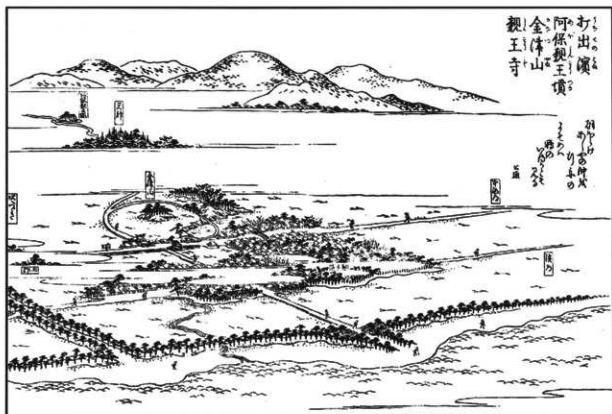
—第17地点で検出した外周濠の発掘調査成果—



2008年12月
芦屋市教育委員会

金津山古墳発掘調査報告書

—第17地点で検出した外周濠の発掘調査成果—



2008年12月

芦屋市教育委員会

序

芦屋市内には、多くの遺跡があります。その中にあって、市内春日町に位置する金津山古墳は、千数百年の永きにわたって大切に守られてきました。この古墳は、阿保親王が打出の民を慈しんで財宝を埋めたという伝承がありますし、江戸時代から明治時代にかけて墳丘上に祠が営まれており、古墳というだけでなく、打出の人々にはなくてはならない大切な場でありました。

平成の世になってからは、古墳の周辺で相次いだ発掘調査によって、思いがけず、この古墳の本来の姿が現れるとともに、その形が変わっていった過程も明らかになってきました。円墳だと思われていた墳形は、帆立貝形の前方後円墳であることがわかりました。古墳の濠からは、埴石や円筒埴輪、鶏や人物、家などを含む形象埴輪がたくさん出土しました。また、前方部は、南北朝時代の打出合戦や打出浜合戦の際に、磔として用いられたかもしれないことがわかりました。さらに、平成20年1月になってから、新たに二重目の濠（外周濠）がみつかり、金津山古墳が、西摂津にいますます稀有な存在であることがわかりました。

今回、新しくみつかった金津山古墳の外周濠は、一瞬わたしたちの前に姿を現したあと、多くの方々のご尽力によって地中に保存され、後世の人々に伝えられることになりました。21世紀は、わたくしたちを取り巻く歴史環境や自然環境がますます大切とされる時代です。大切な文化遺産を後世に引き継ぐべく、努力していきたいと思います。

平成 20 年 12 月 24 日

芦屋市教育委員会

教育長 藤原 周三

例 言

1. 本書は、兵庫県芦屋市春日町156番地2号に所在する金津山古墳（第17地点）の埋蔵文化財発掘調査の正報告書である。発掘調査は、芦屋市教育委員会が知的障害者授産施設新築事業に伴い、確認調査を平成19年7月17日～平成19年7月27日、本発掘調査を平成20年1月7日～平成20年1月17日の期間に実施した。遺跡は、兵庫県教育委員会が平成16年3月に公開している『兵庫県遺跡地図―第1分冊―（発掘調査の手引き・遺跡地名表）』の地名表編 P125に「地図番号96、遺跡番号070021金津山古墳」（種類：古墳、時代：古墳）、として掲げられている。また、その位置や範囲については、同『兵庫県遺跡地図―第2分冊―（遺跡分布地図）』の図版96（国土地理院発行2万5千分の1地形図複製「西宮」）に周知の埋蔵文化財包蔵地として記載されている。同遺跡は、〔芦屋市教育委員会2001〕でも周知されている。
2. 本書は、平成19・20年度事業として芦屋市教育委員会の責任の下、芦屋市土地開発公社との事業協定に基づき、平成20年12月末を期限に公開するもので、芦屋市文化財調査報告第75集である。なお、確認調査・発掘調査並びに整理作業費や報告書印刷費は、すべて芦屋市土地開発公社が負担した。記してその協力に感謝したい。また、現場の発掘作業は、株式会社島田組に委託した。
3. 発掘調査は、芦屋市教育委員会が調査主体となり、社会教育部生涯学習課文化財担当主査森岡秀人（学芸員）と同担当の学芸員竹村忠洋の指導の下、確認調査は同課嘱託守田めぐみ（学芸員）が、本発掘調査は同課嘱託白谷朋世（学芸員）が担当した。なお、調査体制については、第1章第2節に記したとおりである。
4. 本発掘調査の実施に際しては、兵庫県教育委員会の下記の方々からご指導・ご助言を受けた。
深井明比古（文化財課長補佐兼審査指導係長）、平田博幸（同室主査）、柏原正民（同室主査）
5. 遺物・資料整理作業および報告書作成作業は、森岡・竹村・守田・白谷が担当し、同課嘱託坂田典彦（学芸員）の支援を得た。整理補助員として、生涯学習課臨時の任用職員 桑原育世・近藤奈保子・新野純子・須田佑子・西岡崇代・山本麻理・横森美和子が従事した。また、本発掘調査において、文化財ボランティアの梅本素子・久保ふく子・小島静子・仲谷由利子諸氏にご支援いただいた。
6. 本書の編集は、森岡の協力を得て白谷が担当した。本書の執筆は、森岡・竹村・守田・白谷が担当した。執筆分担の責は目次および担当節末尾に掲げたとおりである。
7. 本書に掲載した地図は、第4図が国土地理院発行5万分の1地形図「大阪北西部」（平成11年要部修正）図幅、第5図が芦屋市発行2千5百分の1基本図「芦屋駅」「香櫨園」（平成18年2月修正）を使用した。
8. 本書で使用した方位は、真北と磁北を併用している。標高は、東京湾平均海水準（T.P.）で表示している。
9. 本発掘調査状況のビデオ撮影は、山本徹男氏（市内在住・映像作家）に依頼した。
10. 本報告に関わる遺物・写真・図面等の調査記録等は、芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課三条文化財整理事務所において保管している。広く活用されることを希望する。
11. 現地調査および調査前後の検討、報告書の作成において、来訪された上、御教示、御助言を受けた勇正廣・横本誠一両氏はじめ、下記の方々および機関に専門的な立場や地元の経験的な視野から献身的にご教示、ご協力、ご支援を賜った。ご芳名を記し、深く感謝の意を表する。
青木臨時、青柳泰介、赤塚次郎、浅岡俊夫、天野末喜、荒川 史、伊井孝雄、勇 正廣、石井清司、石野博信、一瀬和夫、今尾文昭、宇野慎敏、梅本謙一、梅本康広、大久保敬也、大平 茂、岡田 努、岡山真知子、小長谷正治、鎌方正樹、神木哲男、北山峰生、木許 守、小泉裕司、近藤雅樹、合田茂洋、芝野康之、清水 晃、白井久美子、杉本 宏、関川尚功、高木恭二、立花 聡、田中晋作、多淵敏樹、儀 正市、辻川哲朗、露口真広、中畔明日香、中沢 勝、中澤康則、新納 泉、西川卓志、沼澤 豊、花田勝広、坂 靖、引原茂治、横本誠一、福永伸哉、藤川祐作、藤田和孝、前田敬彦、松本岩雄、松本洋明、松本光雄、豆谷和之、丸山 潔、右島和夫、村川行弘、森田克行、柳沢一男、山本三郎、吉村公男、和島恭仁雄
伊丹市教育委員会、大阪大学大学院文学研究科考古学研究室、奈良県立橿原考古学研究所（以上、順不同、敬称略）

本文目次

序	芦屋市教育長 藤原周三 ...	i
例言		ii
本文目次		iii
挿図目次		iv
表目次		iv
図版目次		iv
第1章 序章		
第1節 本発掘調査に至る経緯と経過	(竹村忠洋) ...	1
第2節 調査組織	(竹村) ...	3
第3節 調査の経過	(白谷朋世) ...	3
第2章 金津山古墳をめぐる古環境と既往の調査		
第1節 金津山古墳周辺の地理・地質と歴史・伝承	(森岡秀人) ...	5
第2節 既往調査の概要	(森岡) ...	10
第3章 発掘調査の成果		
第1節 確認調査の概要	(守田めぐみ) ...	17
第2節 本発掘調査の方法	(白谷) ...	21
第3節 基本土層	(白谷) ...	22
第4節 遺構	(白谷) ...	24
第5節 遺物	(白谷) ...	27
第4章 まとめ		
第1節 金津山古墳の墳形・規模・年代	(白谷・森岡) ...	30
第2節 二重周濠の歴史的意義	(森岡) ...	33
第3節 金津山古墳の二重周濠の保存について	(竹村) ...	43
引用・参考文献		44
報告書抄録		
奥付		

挿図目次

第1図 芦屋市文化財保護審議会委員の視察状況	2	第13図 確認調査土層柱状図	19
第2図 作業風景	4	第14図 埴輪実測図	20
第3図 作業風景	4	第15図 調査区平面図	21
第4図 芦屋市遺跡地図	5	第16図 土層断面図	23
第5図 金津山古墳周辺遺跡分布図	8	第17図 外周濠平面図	25
第6図 芦屋川・宮川流域地形分類図	9	第18図 外周濠土層断面図	25
第7図 金津山古墳墳丘実測変遷図	10	第19図 埴輪出土状態平面図	26
第8図 金津山古墳推定復元図	12	第20図 埴輪実測図	28
第9図 金津山古墳の既往調査(1)	14	第21図 金津山古墳関連埴輪実測図	36
第10図 金津山古墳の既往調査(2)	15	第22図 金津山古墳関連古墳平面図	39
第11図 トレンチ配置図および確認調査遺構平面図	17	第23図 深基礎掘削時の工事立会状況	43
第12図 確認調査土層断面図	18		

表 目 次

第1表 西摂平野における主要首長墳・群集墳年輪表	32	第2表 近畿圏主要二重濠・外周濠関連古墳一覧表	42
--------------------------	----	-------------------------	----

図版目次

図版1 金津山古墳および周辺航空写真(1990年)		外周濠掘削状況(北北西から)	
調査地近景(北西から)		外周濠完掘状況(北北西から)	
調査地全景(北から)		外周濠掘削状況(南から)	
図版2 第1トレンチ(東から)		外周濠完掘状況(南から)	
第2トレンチ(南から)		図版6 外周濠南部検出状況(東から)	
第3トレンチ(東から)		外周濠南部掘削状況(東から)	
第5トレンチ(西から)		外周濠南部完掘状況(東から)	
第6トレンチ(西から)		南壁における外周濠埋土(北から)	
第7トレンチ周濠埋土(北西から)		断割トレンチにおける外周濠埋土(北から)	
第8トレンチ南壁土層断面(北から)		図版7 外周濠埴輪出土状況(北北東から)	
第7・8トレンチにおける周濠検出状況(北西から)		外周濠埴輪出土状況(南南西から)	
図版3 調査区全景(北から)		外周濠埴輪出土状況(西北西から)	
金津山古墳墳丘と検出した外周濠(西から)		外周濠埴輪出土状況(部分)(手前が東)	
図版4 調査区西壁(東から)		外周濠埴輪出土状況(部分)(手前が北東)	
調査区南壁(北から)		図版8 円筒埴輪(1・3・4・9・13)	
調査区北壁東部(南から)		円筒埴輪(2・5・7・10・12・14・15)	
調査区東壁北部(西から)		円筒埴輪(8)	
調査区東壁北部検出の周濠埋土(西から)		円筒埴輪内面部分(1)	
図版5 外周濠検出状況(北北西から)		円筒埴輪外面部分(4・9)	

第1章 序 章

第1節 本発掘調査に至る経緯と経過

芦屋市土地開発公社が所有する兵庫県芦屋市春日町156番地2号（敷地面積315.89㎡）において、木造・鉄筋コンクリート造地上2階建の知的障害者授産施設の新築計画が進捗したが、周知の埋蔵文化財包蔵地である金津山古墳の分布範囲内にあることから、事業者である社会福祉法人芦屋なかよし福祉会理事長川崎富子より文化財保護法第93条第1項の規定に基づく発掘届出書が、平成19年（2007）6月8日付で本市教育委員会に提出された。当該敷地は金津山古墳後円部の北西側に隣接しており、平成2年（1990）には共同住宅建設に伴う確認調査が実施され、敷地南東部で周濠の一部が確認されている（金津山古墳第6地点）〔森岡・和田1990b〕。本市教育委員会では、届出書から工事内容と第6地点の調査結果を照合し、地中に保存されている金津山古墳後円部の周濠が損壊すると判断した。

ところで、当該地は平成2年度に芦屋市土地開発公社によって先行取得され、平成5年度には利用計画の一環で、市文化財保護審議会から金津山古墳環境整備事業計画の一つとして「古墳埴輪館」建設候補の建議が出された土地であるという経緯がある。しかし、今般進められる事業が金津山古墳周濠の保存活用という当初の取得目的とは大きく異なっていることから、平成19年度第1回芦屋市文化財保護審議会が7月13日に緊急に開催され、当該事業計画と金津山古墳の保存活用計画の齟齬について審議された。出席委員全員からは、金津山古墳周濠を破壊することは容認できず、周濠を保存するために事業地の変更や建物の設計変更等あらゆる方法を検討すべきという意見が出され、その前提作業として本事業計画による遺構面・遺物包含層への影響などを把握するために確認調査を実施することとなった。

確認調査は、本市生涯学習課文化財担当学芸員竹村忠洋と同課嘱託守田めぐみ（学芸員）を調査担当者として、平成19年（2007）7月17日から7月27日まで実施した。発掘作業は事業者が株式会社島田組に委託し、調査に係る費用は事業者が全額負担した。当調査では平成2年に確認された金津山古墳の周濠が再度検出され、それが計画されている事業によって損壊を受けることが明らかとなった。確認調査の期間中、7月25日には文化財保護審議会（多淵会長・村川委員・神木委員）が周濠の状態等を現地で検証した（第1図）。

このような経緯を経て、芦屋市文化財保護審議会から芦屋市保有土地検討委員会へ、重要遺跡の一角を占める当該敷地に埋蔵される金津山古墳周濠の保存を求める意見書が8月に提出された。

確認調査の終了後、9月27日には第2回芦屋市文化財保護審議会が開催され、周濠を破壊しないように設計変更すべきという意見が出された。11月29日に開催された第3回芦屋市文化財保護審議会では、事業者と本事業の所管課である本市保健福祉部障害福祉課も同席し、設計変更について具体的に話し合われた。その結果、計画事業の設計変更を行い、周濠の外側肩に沿って外側に3m幅で保護範囲を確保し、周濠を地下保存することとなった。設計変更図面を受理した本市教育委員会は、これを文化財保護法第93条第1項の規定に基づく発掘届出書に添付し、指導事項として本発掘調査が必要とした上で、12月12日付で兵庫県教育委員会に進達した。それに対して、12月20日付で兵庫県教育委員会から事業者には、工事着手前に発掘調査を実施する指示の通知があった。

本発掘調査は、周濠が掘り込まれた遺構面で損壊を受ける範囲を対象として、生涯学習課文化財担当

学芸員竹村と同課嘱託白谷朋世（学芸員）を担当者として、平成20年（2008）1月7日から1月17日まで実施した。費用は芦屋市土地開発公社が全額負担した。発掘作業は芦屋市土地開発公社が株式会社島田組に委託した。

本発掘調査2日目となる1月8日に、確認調査で把握されていなかった外周濠が検出された。その連絡を受けて、藤原教育長・松本社会教育部長・川崎次長・森岡生涯学習課（文化財担当）主査が現地に急行し、今後の対応について協議した。1月9日には、文化財保護審議会村川委員が現地検証を行い、阪神間で二重目の周濠が確認されたのは伊丹市所在の御願塚古墳に次いで2例目で、稀少な遺構の遺存が確認された金津山古墳がこれまで以上に学術的に重要な古墳であると評価された。1月16日には文化財保護審議会神木委員が現地を視察した。1月18日には調査成果を報道関係機関に公表し、1月19日には新聞各紙に「二重周濠発見」の記事が掲載された。1月22日には午前中に多淵会長が現地を検証し、午後2時から現地見学会を開催した。見学会では、新修芦屋市史編纂事業にも関わった村川委員が参加者約160名を前にして、文化財としての金津山古墳の意義について市民・研究者に説明した。

本市教育委員会は外周濠の検出以降、事業者以外周濠を保存できるように事業変更の検討を求めた。本発掘調査終了後、1月30日に開催された第4回芦屋市文化財保護審議会での審議の結果、審議会として事業者以外周濠と外周濠を保存するための設計変更をさらに強く要望することとなった。また、学識経験者で、古墳について詳しい榎本誠一氏（大手前大学人文学部教授・大手前大学史学研究所所長）、勇正廣氏（元兵庫県文化財パトロール巡視委員・新修芦屋市史古墳時代執筆）、伊井孝雄氏（元芦屋市立山手中学校社会科教諭・川西市加茂遺跡を守る会会長・文化財保存全国協議会全国委員）、沼澤豊氏（千葉県立現代産業科学館副館長）、白井久美子氏（財団法人千葉県文化財センター）、藤田和尊氏（御所市教育委員会生涯学習課係長・奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）から現地検証並びに察知された所見に基づくコメントをいただいた。これを受け、2月2日には市幹部による緊急関係者会議が開催され、芦屋市長山中健から文化財を保存する方針が示された。周濠の保存が決定したのを受けて、埋め戻しが行われていなかった調査区に、2月21～27日に埋没保存を前提として砂を搬入し、遺構面上に厚さ50cmの保護層を形成した上で残土を戻し、現状復旧した。

2月23日に開催された第5回芦屋市文化財保護審議会では、事務局から委員に二重の周濠を保存する方針で、保健福祉部と協議していくことを報告した。その後、教育委員会生涯学習課（文化財担当）と保健福祉部障害福祉課、事業者で設計変更について協議が重ねられ、協議で取り決めた金津山古墳の二重の周濠（内周濠・外周濠）を保存するための条件をまとめ、2月29日付で市教育委員会から事業者へ明示された。なお、条件の具体的内容については、第4章第3節で触れている。この条件を受けて設計変更が行われ、本市教育委員会にその設計図が提出された。本市教育委員会は、受理した設計図を審査し、金津山古墳の二重周濠が保存されると判断した。

工事着手後、基礎掘削が行われた平成20年7月15～18日に、竹村が立会し、工事によって周濠が損壊を受けていないことを確認した。立会の概要は、第4章第3節で示す。（竹村忠洋）



第1図 芦屋市文化財保護審議会委員の視察状況
（2007年7月25日、金津山古墳後門部墳丘上）

第2節 調査組織

今回の本発掘調査および資料整理、報告書作成は、芦屋市教育委員会を主体として、以下の調査体制で実施した。

(1) 平成19年度（確認調査および本発掘調査）

教育長藤原周三、社会教育部長松本博、社会教育部次長川崎正年、社会教育部主幹白川誠二、生涯学習課（文化財担当）課長補佐大橋伸一、同課主査森岡秀人（学芸員）、同課主事春木和子、同課学芸員竹村忠洋（確認調査および本発掘調査担当）、同課嘱託守田めぐみ（学芸員、確認調査担当）、同課嘱託白谷朋世（学芸員、本発掘調査担当）、同課嘱託坂田典彦（学芸員）、同課臨時的任用職員国政恭子・木本真味・竹歳真子、同課整理補助員桑原育世

(2) 平成20年度（整理作業および発掘調査報告書の作成）

教育長藤原周三、社会教育部長橋本達広、生涯学習課長津村直行、同課（文化財担当）主査森岡秀人（学芸員、報告書作成）、同課主査細井良行、同課主事春木和子、同課学芸員竹村忠洋（報告書作成）、同課嘱託白谷朋世（学芸員、報告書作成・編集）・守田めぐみ（学芸員、報告書作成）・坂田典彦（学芸員）、同課臨時的任用職員木本真味・田中智美、同課整理補助員桑原育世・近藤奈保子・新野純子・須田佑子・西岡崇代・山本麻理・横森美和子

(3) 文化財保護審議会（平成19・20年度）

多淵敏樹（会長、兵庫県都市計画審議会会長・神戸大学名誉教授）、俵正市（副会長、俵美術館館長・弁護士）、神木哲男（神戸大学名誉教授・奈良県立大学名誉教授）、近藤雅樹（国立民族学博物館教授）、村川行弘（大阪経済法科大学名誉教授）（竹村）

第3節 調査の経過

今回の本発掘調査は、平成20年（2008）1月7日から1月17日まで、実働7日で実施した。調査面積は84.0㎡である。本発掘調査終了後の1月22日には、現地見学会を実施し、遺構面を保護するための埋め戻しを2月21日～27日に行った。また本発掘調査終了後に、芦屋市教育委員会三条文化財整理事務所において、森岡・白谷を担当者として遺物・図面・写真整理等を行い、引き続き本報告書の作成・編集作業を行った。なお、本発掘調査や埋め戻し作業の経過および作業内容については、調査日誌抄を掲げて示す。（白谷朋世）

【調査日誌抄】

平成20年（2008）1月7日（月）雨のち曇り

調査初日。重機や器材を搬入する。10時から岡村徹建築研究所岡村氏立会の下で、工事による掘削範囲を確認したあと、安全確保のために隣地境界のブロック塀や生垣から多少の控えを残して調査区を設定する。重機を用いて表土とその直下の盛土層を除去し、近世～近代耕作土である灰色粘性砂質

土（1層）を検出したあとは、人力によって掘削し、基盤層である大阪層群を検出した。調査区の西壁と南壁沿いにサブトレンチを設定した。この結果、調査区の北側は1層が南側より一段低くまで掘り込まれており、しかも厚くなっていることが明らかになった。

1月8日（火）晴れときどき曇り

平面精査を行ったところ、調査区南側で地輪片を含む粘質



第2図 作業風景



第3図 作業風景

土の広がりを出した。この粘質土の検出状況や調査区各壁の上層断面を撮影したのち、調査区北側の1層を掘削した。1層からは、18世紀以後の陶器や磁器、ガラス、金属器が出土したが、現代遺物は含まれていなかった。また、粘質土の性格を追求するために南壁沿いのサブトレンチを深掘したところ、この粘質土を最終埋土とする溝が存在していることがわかった。しかも、この溝の方向が、金津山古墳の周濠に並行していることから、金津山古墳に伴う二重目の濠である可能性が浮上した。このため、急遽本庁と連絡を取り、森岡主査・竹村学芸員と藤原教育長、松本社会教育部長、川崎社会教育部次長を交えて対応について協議を行った。

1月9日(水) 晴れ

本日から補助員2名を投入し、図面作成を開始する。まず、調査地点平面図に着手した。

昨日検出した濠の続きが想定される調査区北東部にサブトレンチを設定するとともにこの部分を再度平面調査したところ、基礎層を引き裂く噴砂とその上に堆積している砂層および粘質土を検出した。砂層や粘質土の平坦的な広がりも、想定した周濠の延長部分に合致しており、周濠の検出長は8mとなった(以下、一重目の周濠を「内周濠」、新たに検出した二重目の周濠を「外周濠」と呼称する)。また、調査区南寄りの外周濠にサブトレンチを設けて土層を観察した結果、遺物の包含量の多い粘質土の分布は限定されていることが明らかになった。そこで、調査区中央部から北側の外周濠を完掘した。

外周濠検出の連絡を受けて、村川芦屋市文化財保護審議委員が現地検証し、この遺構が外周濠に間違いのないとの助言をいただいた。午後からは、外周濠南部の粘質土を掘削し、遺物を検出したところ、周濠の肩に沿うようにして、長さ150cm、幅50cmの範囲に集中して円筒埴輪片が出土した。埴輪の出土状態の写真撮影を行い、本日の作業を終了。

1月10日(木) 晴れ

昨日出土した埴輪の出土状態の記録を行うため、平面図を作成し、レベルを計測する。調査区各壁の土層断面図も作成する。また、山本徹男氏によるビデオ撮影を行った。外周濠出土の埴輪は焼成があまり軟質であるため、翌日雨天である場合を想定して、本日中に収束し上げた。

1月11日(金) 曇りのち雨

天候悪化のため、作業を中止する。

1月15日(火) 晴れ

調査区南部で検出している外周濠の埋土は、埴輪を含む粘質土以外に3つに大別できるので、上から順に掘削し、その都度写真撮影や図面作成を行った。再度、教育長、部長、次長の現地視察あり。最終的に完掘した結果、外周濠の底面は凹凸が著しく、調査区南端はポットホール状のほみがあり、

最も深くなっていた。外周濠完掘後に調査区全面を清掃し、調査区全体の写真撮影を行う。遺構平面図や調査地平面図が完成しなかったため、作業を翌日に持ち越す。

1月16日(水) 晴れ

調査地平面図の調査区部分を仕上げた後から引き続いて遺構平面図を完成させる。外周濠の西側を埋め戻し、後日の現地見学会の準備を行ってから、重機を搬出した。また、埴輪や測量器材以外の器材を三条整理事務所へ搬送する。最後に調査地平面図に周辺道路や電柱を記入した。なお、本日は特木芦屋市文化財保護審議委員の現地検証あり。

1月17日(木) 晴れ

残りの器材を搬出し、現地調査を終了した。

1月18日(金) 曇り

午後1時から現地で記者発表を行うため、調査区内の再清掃を行う。現地見学会のためのロープも設営。記者発表には5名の記者が来場。

1月22日(火) 曇り一時雨

現地見学会の準備を行う。昨日までの雨で調査区に水が溜まっていたので、排水作業から開始する。見学者通路でぬかるんでいる部分にコンパネを敷き、パネル展示や遺物展示のコーナーを設置する。設営中に多賀芦屋市文化財保護審議委員の現地検証あり。午後2時から村川委員にも協力をいただき現地見学会を実施したところ、平日であるにも関わらず約160名の見学者あり。伊丹市教育委員会中野明日香氏、新修芦屋市史執筆者の勇正廣氏も来場。夕方には大手前大学教授榎本誠一氏の来場あり。兵庫県下の外周濠の顕例を御教示いただくとともに、今回検出した濠が、まさしく外周濠の要件を満たしているとお墨付きをいただく。

1月24日(木) 曇り一時雪

保存可否かの結論がでないため、調査区の養生を行う。雨水を汲み出した後に、壁面および遺構面にブルーシートを敷設する。また、榎本氏の助言に従って、花粉分析用に南壁の外周濠埋土を3種類採取した。さらに、平成元年に金津山墳丘上に設置した国土地理院を用いて、今回の調査区を測量した。かなり寒い。

1月29日(火) 雨

島田組の山下氏から現場の状況の報告あり。かなり水が溜まっているが、ブルーシートは異常な位のこと。次長から、完全な記録保存には何が必要かとの問い合わせあり。

2月21日(木) 晴れ

調査区の掘り戻しを開始する。遺構面に人力で砂を入れ、踏み固める。その上に排土を盛って、ほぼ現状に戻した。

2月27日(水) 晴れ

排土に覆った最終掘り戻し完了。

第2章 金津山古墳をめぐる古環境と既往の調査

第1節 金津山古墳周辺の地理・地質と歴史・伝承

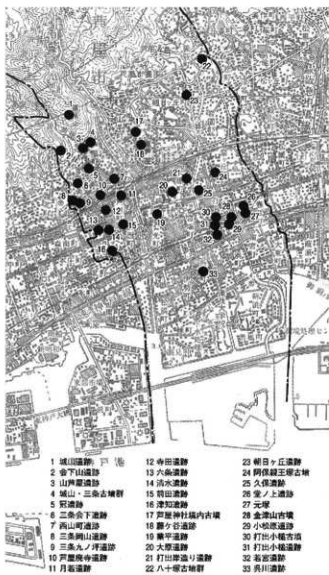
所在地と立地要件 金津山古墳は、兵庫県芦屋市春日町153番地に所在する。芦屋市南東部、六甲山から大阪湾に向けて張り出す翠ヶ丘丘陵上に立地する前方後円墳の一つで、これまでに10数回の調査がなされてきた。ここでは、本地点の報告に先立ち、その立地をめぐる地理・地質環境と伝承を含む歴史的環境について、ごく近辺の様相と動態に限り簡潔に述べておきたい。

本墳は、阪神電鉄打出駅の北東150m付近の静かな住宅街に位置し、六麓荘・岩ヶ平台地から沖積地に向って最も南に派生してくる舌状低台地の縁端、標高9～10mを測るところに立地している。周辺は既に宅地化し、現在は共同住宅や民家の中に後円部のみが円墳のごとくその墳丘をとどめているにすぎないが、これまでの調査で埋没していた前方部も確認されており、発掘成果に基づき、1990年前後には円墳説が完全に訂正された[森岡1988c・1990・1995]。往時は短い前方部を南に向けた帆立貝形前方後円墳であったことが判明している。

後円部には、今もなお松樹の疎生と下草の繁茂がみられ、昔日の面影を偲ばせている(表紙写真)。金津山古墳はその眺望の良さからみて、大阪湾に臨む台地先端部にあつてランドマークとしても最も好条件の位置を占めているとみなされる(第4・5図)。

地誌に見える伝承の数々 後述するように、この古墳には、金塚・黄金塚・金津丘・金津山といったさまざまな呼称がみられるが、今日では金津山古墳という呼び名が学界でも市民の間でもほぼ定着している[村川1971、勇・藤岡1976、田辺・岩本・森岡ほか1979]。複数の名の由来については、黄金埋蔵の伝説を伴うことではほぼ共通しており、多くの地誌類にその伝承は興味深く語り継がれ、今日まで大きな変質もなく継承されている。以下では、先ずこうした民俗とも関わるそれらを瞥見しておきたい。

最古の地誌 金津山古墳のことが記されている最も古い地誌をたどると、既に元禄14年(1701)の『摂陽群談』にみえ、「金津山 兎原郡打出村に向ふ北の岡山也。所伝云、阿保親王此岡山に於て、金瓦一万、黄金一千枚埋せ、



第4図 芦屋市遺跡地図 (1/50000)

此里飢饉に及ぶ時、是を掘って飢を養へしと也。因て金津の号あり。土俗三十一字を以て、伝え云。朝日さす入日輝この下に、金千枚瓦万枚云々。」と記している。18世紀初めのこの地誌がいかなる所伝に基づいてこれを記述したかは定かではないが、これを遡る類似の民俗・古墳伝承は全国的にみられる。金津山をめぐる伝承の起源も中世に遡る可能性を考えている〔森岡・和田・明尾1993〕。

続く18世紀～20世紀代の地誌類 ほぼ同様な伝承は、宝永7年(1710)の『兵庫名所記』、寛政8年(1796)の『摂津名所図会』など、18世紀代の史料や江戸時代末期から明治・大正期にかけての数多くの地誌類、郷土史料にも登場し、同内容の口伝・文献は広く各地に分布するようになる〔村川1971、勇・藤岡1976、森岡1988e〕。かつて打出天神の祭で歌われた「みこしきき音頭」にも「打出名所かずかずあれど、わけて名高い黄金塚」という有名な一節がある(『打出史話』〔天王寺谷1940〕)。

続いて18～20世紀の文献史料に登場する金津山について、以下原文を掲げて異同の比較に供したい。『兵庫名所記』〔菊屋新右衛門著 宝永7年(1710)刊〕には、次のようにみえる。

卷之上

金津山 打出村に向、北の岡山也。阿保親王、此岡山に於て、金瓦一万、黄金一千枚を埋せ、此里飢饉におよぶ時、是をほり取てやしなふべしと也。よって金津の号ありと、俗伝に云、三十一字を以て是を伝ふ。

朝日さす入日輝クノ下ニ金千枚瓦万枚ト云々。

『摂津名所図会』〔秋里籬著、竹原春朝京画 寛政8年(1796)刊〕の「菟原郡」の項には、次のように描かれている。

金津丘 打出村の西端に、一堆の冢丘あり。これをいふ。土人口称に云く、むかし阿保親王此地に殿舎ありし時、黄金千枚、金瓦万枚を此冢の中に蔵め置きて、此里人飢饉に及ぶ時、これを掘り出して、五穀に交易て飢を渡ぐべしとなり。此所の牧童今に歌謡ふ。其言に云く。

朝日さす入日かゞやく此下にこがね千枚・瓦万枚

按ずるに親王の御陵にして別荘も此地にありしが、此辺の字に御所内・堂の上といふ所あり。此親王は在原の行平・業平の御父なり。

この名所図会には、「打出浜」「阿保親王墓」「親王寺」などととも、「金津山」と記して、北西方向に辿っていく西国街道の本街道の北側に接して松の木立が繁茂する墳丘を描き、その周囲には小径が巡らされている(内表紙挿図)。識者の中には、この内側に濠状の凹地をなしていたと推測する向きもあり〔細川1963〕、実態描写か否かあらためて注意をひく〔勇・藤岡1976〕。

19世紀初頭の『播磨名所巡覧図絵』〔村上石田著、中井藍江画 文化元年(1804)刊〕巻第一は、次のように記載する。

金津山 打出村に向ふ所の岡山也。阿保親王此岡山において金の瓦一万、黄金一千枚を埋ませ、此里飢饉に及ばん時、是を掘取てやしなふべしと也。よって金津の号あり。俗伝に三十一字を以て是を伝ふ。

朝日さす入日輝クノ下ニ金千枚瓦万枚云々。

およそ100年の時を経て、『西摂大観』〔仲彦三郎 明治44年(1911)刊〕では、次のような記述がなされている。

打出村電車停留場より北へ行くこと数十歩にして右手に一円丘あり、土人之を黄金塚といふ。親王御陵に参拝する通路の側なり、御陵を距ること数町に過ぎず。是れ亦上古の墳墓なるべし、土人いふ昔阿保親王の御殿ありし処にて、黄金千枚金瓦万枚を此墳の中に蔵め置き、一たび里人飢饉に遇はばこれを掘出して五穀に交換し飢を渡ぐべしと諭されたまへりと 此里の童謡に朝日さす入日かゞやく此下にこがね千枚瓦万枚 此

地方は親王の御領内なるを以て別荘を建てられしことも事実ならん。此地の字に御所内堂ノ上といふ所に残れり。

大正時代に入って、『武庫郡誌』〔武庫郡教育会編纂 大正10年（1921）刊〕の「精道村 名所旧跡」には、次のように記されている。

金津丘 俗に黄金塚と称す。打出電車停留場より北へ行くことを数十歩にして、右方に一円丘あるもの即ち之なり。

阿保親王御陵道の附近にて、御陵を距つること数町に過ぎず。是亦上古の墳墓なるべし。伝え云う。昔阿保親王の御殿の在りし所にて、黄金千枚・瓦万枚を此墳の中に納め置かれ、里人飢饉に遭はば、之を掘出して五穀に代へ肌を浚ぐ可しと諭させ給へりと。此里の童謡に、

朝日さす入日かやくこの下にこがね千枚万枚。

此地元親王の御料内なるを以て、別荘を構へられたるも事実なるべし。其字に御所内堂の上の名存せり。

以上、ざっと300年以上に亘る地誌・史料の記載を駆け足で瞥見してきたが、要するに共通して記されていることは、もともとこのあたりには、平安時代の皇族、阿保親王の領地があり、そこに黄金を埋めて、周辺の村人の飢饉に備えたという伝承である。金瓦多数を埋蔵した描写は、おそらく周辺で掘り出された黄色味を帯びた円筒埴輪の大量の破片を目にした人々の往時の印象に由来するものであろう〔森岡1982・1987、芦屋市教委2008b〕。なお、詳しく触れないが、金津山古墳の伝承を異なった角度から取り上げた〔田中1988・1993・1996〕の論考やそれを紹介した〔芦屋市教委2008b〕も興味深い。

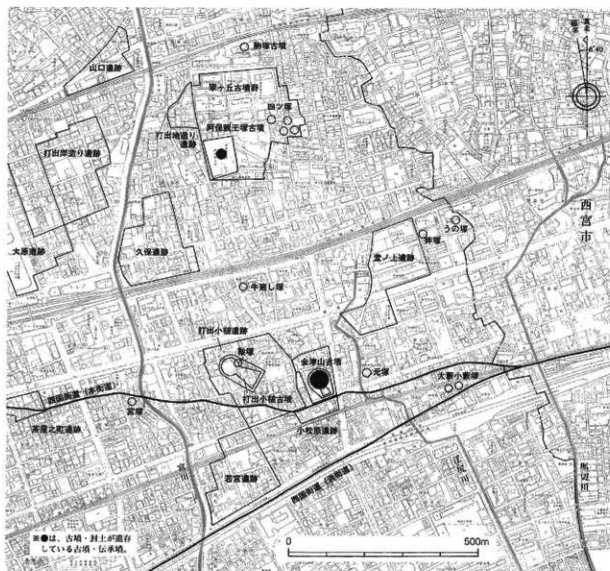
周辺遺跡の特色 さて、以上のような特異な伝承をもつ金津山古墳の立地する翠ヶ丘台地の周辺には、古墳時代前・中期を中心に営まれた翠ヶ丘古墳群があり、阪神地方の古墳群を造営した首長系列の総体からみた場合、芦屋グループとしての存在を顕示している（第5図）〔森岡1990・1995・2007・2008a、森岡・村川1996、森岡・吉村1992〕。標高30m付近に多数の三角縁神獣鏡の出土で知られる直径32mの円墳である阿保親王塚古墳（4世紀前半）があるほか、標高10m付近には全長80m前後の前方後円墳と推定されるようになった打出小槌古墳（5世紀後半～末）〔森岡・辻2000a・2006a、芦屋市2000・白谷2008〕や、全長55mの本墳（5世紀後半）が遺存する〔森岡1987・1988d・2002a、芦屋市教委2008a・2008b〕。さらに、台地上には四ツ塚・駒塚・うの塚・斧塚・鞍塚・牛廻し塚・大藪小藪塚・元塚・宮塚等の塚名の伝承地が多数残っている。これらのうち、古墳として確かな駒塚〔勇・藤岡1976、古川1976〕以外は、四ツ塚〔森岡・辻2001b〕・斧塚〔森岡1986c〕・牛廻し塚・大藪小藪塚・元塚〔森岡1977、竹村・白谷編2005〕などは、何らかの発掘が試みられている伝承墳や塚である。阿保親王塚古墳東方の四ツ塚近傍からは古墳時代後期の須恵器平皿が出土していることから、古墳時代後期の古墳群が群集墳の形態を襲って存在した可能性が以前から指摘されている〔森岡1992c〕。今のところ、40～80mクラス的大型古墳から成る盟主墳3古墳については、時期的な重なりがない点に系譜の有意性を見い出せよう〔森岡1990・2002a・2007・2008a〕。

また、本墳の南西に位置する縄文時代晩期の遺跡が若宮町でみつかった（若宮遺跡）。阪神・淡路大震災の復興に伴う確認調査で新出した遺跡であり、河道や土坑などの遺構と縄文土器・石器が出土している。また、弥生時代前期後半の集落へと引き継がれており、堅穴住居群と覚しき生活跡が稠密な分布で確認されている。本丘陵端部への土地利用が早い段階に進んでいることを証するものである〔森岡・竹村編1999、竹村編2002、森岡2002a〕。

本墳の周辺で最も大きな遺跡は、打出小槌遺跡である〔芦屋市教委2001〕。打出小槌遺跡は、昭和61

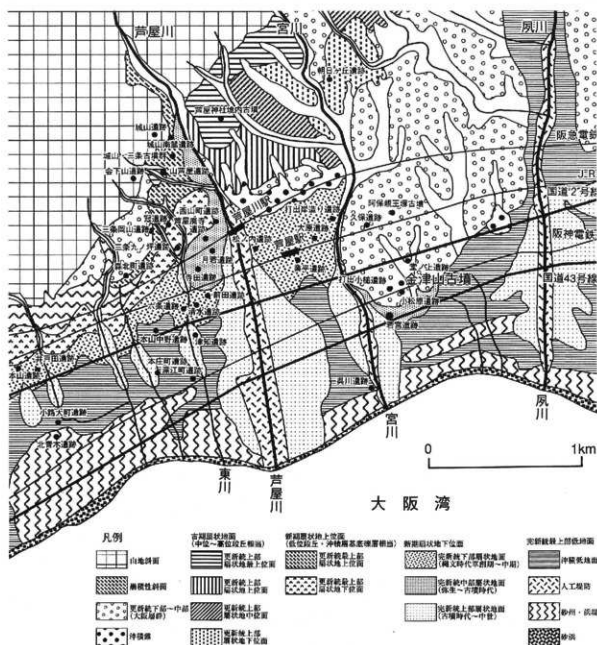
年2月に実施した打出小槌町32番地（打出小槌遺跡第1地点）の試掘調査によって確認された比較的新しい遺跡である〔森岡・木許1986〕。同年5～8月の発掘調査では、従来知られていなかった5世紀末の古墳1基が確認され、打出小槌古墳と命名された〔芦屋市教委1986・1992、森岡1986a・1986b〕。その後、同第3地点の調査で周濠の南端が確認され一辺35m程度の方墳と推定されるようになった〔森岡・白谷・和田編1993〕。しかし、その後、この古墳は、平成11年7～8月の発掘調査により、全長75～90mクラスの前方後円墳であることが判明した〔芦屋市2000、森岡・辻2000a・2006a・白谷2008〕。

打出小槌遺跡は第1地点の調査以来、調査地はすでに44地点を数え、多くの地点で中世包含層が確認されている。第1地点で確認された打出小槌古墳は、15世紀後半～16世紀初頭の大規模開発で墳丘が完全に削平され、その後礎石建物や池状遺構とそれに取り付け溝が掘開されていた〔芦屋市教委1986、森岡1986a・1993〕。また、第4地点以後は中世水田面が確認されている。これらの水田に伴う畦や用水路、水口の検出例は乏しいが、各水田面には多くの唐犁耕作痕、人・牛の足跡が認められ、芦屋地方の中世営田の一面面を窺い知ることができる。これらの水田の開発時期は、鎌倉時代に遡る可能性が指摘できるが、より南方の台地面では平安時代末期まで遡る可能性がある〔大手前女子大学史学研究所1990〕。



第5図 金津山古墳周辺遺跡分布図 (1/10000)

第41地点では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の粘土採掘坑が確認されている〔竹村・白谷編2007〕。また、打出小槌遺跡に東接する小松原遺跡では、中世削平面に加えて弥生時代後期の大溝、平安時代の土坑群の他、縄文・弥生時代の溝や土坑・落ち込みも確認されている〔森岡・和田1990a〕。なお、第8地点では、供献された弥生時代中期後半の土器もみられ、おそらく方形周溝墓の一部と推定される〔森岡・辻2001a〕。打出小槌遺跡第4地点からは旧石器が出土しており、注目される。第4地点では、地山直上に設営された平安時代の水田耕土層内から多数の剥片と共に国府型ナイフ形石器1点が出土している〔大手前女子大学史学研究so1990〕。典型的なナイフ形石器は芦屋市内ではこのほかに岩ヶ平遺跡出土の1点と打出小槌遺跡第22地点出土の1点〔大川・半澤1997、芦屋市2000〕しか知られておらず、発掘調査により発見されたのは2例のみである。これら旧石器は必ずしも原位置を保っているとはいえないが、その存在は六甲山地南麓部の台地や平野部で旧石器時代の人々の生活痕跡を確認し得る可能性を



示している。以上、本墳築造の歴史環境を知る上に不可欠な遺跡を取り上げてみた。

地質環境の中の金津山 金津山古墳は、中部更新統の大阪層群上部によって構成される台地上に立地している。この台地は、翠ヶ丘台地と呼称されており〔前田1971〕、東西を比較的目立つ開析谷によって画されている。西側は最終氷期に宮川が形成したと考えられる開析谷に、東側は西宮市大谷町付近に開析谷が存在している。翠ヶ丘台地は大阪湾へとのびる舌状の形態をなし、沖積低地側に大きく張り出している。調査地は、翠ヶ丘台地南端部に位置している。金津山古墳のすぐ東側には、小規模な開析谷が存在している。この開析谷は、国道2号線付近で2本の谷に分岐している。東側に分岐した谷の谷頭部には、堂ノ上遺跡が立地している。平成10年5月～8月に行われた第4次調査では、谷地内から縄文時代前期～晩期の土器が検出されている〔森岡・竹村1999、辻・森岡・竹村2001〕。この谷は、弥生時代にはほぼ埋積していたことが、この調査によって明らかになっている。

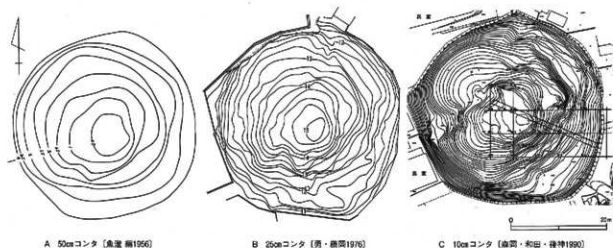
翠ヶ丘台地は、北はJR東海道線、南は打出小植古墳、金津山古墳が立地する付近にかけて、緩傾斜しつつも比較的平坦な地形面を広げている。JR東海道線より以北では、傾斜および起伏度が増す。台地の南縁部では、金津山古墳の前方部前縁付近が大きな傾斜変換点となっている。これが沖積地に伏在した断層崖とみる人もいる。これより南側では、大阪層群で構成される緩やかな斜面が国道43号線北端部付近まで連続している。そして、さらに南側では沖積低地となり、完新統が厚く堆積している（第6図）〔森岡1988c、辻2002a・2002b・2003〕。

（森岡秀人）

第2節 既往調査の概要

既往調査の回数と概要 次に本墳に関わる調査についてその概略を示す。測量・試掘・確認・本発掘と各種の調査が都合10数回にわたって実施されている（第8～10図）。それぞれに地点名が付されているが、印刷費がついて報告書を出したものは3割未満にとどまる。ただし、復元整理などの基礎作業はかなりの所で進んでいる地点が多く、刊行費の予算化が今後の課題である。

最初に実施された墳丘測量調査 明治時代まで、墳丘上には厳島神社の石祠が存在し、石鳥居などもあったとされるが、その後打出天神社に移動された。また、〔細川1963〕によれば明治41年（1908）にそれらは打出天神社に末社として合祀されたとされる。その頃には、二、三の盗掘があったようであり、



第7図 金津山古墳墳丘実測変遷図

墳頂部には数箇所の乱掘坑に基因する自然埋没痕が存在する。昭和20年代、この古墳の墳丘測量が初めて実施され、その実測図が昭和31年に公にされている〔魚澄編1956〕。この調査は、武藤誠・村川行弘・阿氏が中心となって行った。この実測図は0.5m コンタという粗い等高線で表され、その計測値から本墳は径44m、高さ4.1mの円墳とされている。初めての測量記録として貴重なものである（第7図A）。

新修芦屋市史編纂事業に伴う墳丘再測量 昭和49年度から『新修芦屋市史』資料篇の編纂事業が始まり、同書「考古篇 古墳時代」の挿図として本墳の精度の高い墳丘図が必要になったため、再度、芦屋市史編集室が主体となって墳丘実測が行われた。測量結果は、〔森岡1974〕として速報され、昭和51年には図面と所見が公にされている（第7図B）〔勇・藤岡編1976〕。

この調査により、本墳の規模は南北41m、東西39m、高さ4.13mの円墳と補正されることとなった。該書の叙述では、前方後円墳とみる説についてもふれられており、多角的な検討が試みられたが、何ぶん発掘に関わるデータが一切なかった時点での考え方や推測が基本となっているため、墳形については不詳な点や疑問点が数多く残った。

第1地点の確認調査 昭和60年度、本墳後円部の西側隣接地（面積330㎡）において、民家の改築が予定されたため、確認調査を実施した（第8・9図）。調査結果の詳細については、既に公表している〔森岡1987・1988c・1988d〕。

調査は、予測される周濠を横断する場所にトレンチ1本の設定により行い、南北0.5m、東西10mの規模で、調査の経過にしたがい、中央部のみ北側に部分拡幅した。この確認調査により、本墳の周濠が現地地表下2mの深部に初めて確認され、その幅5.3m以上、水成層が下部0.6mの深さで遺存することが分かった。また、待望の円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪も初めて検出され、古墳の築造時期も5世紀後半と推定できるようになった。この調査は、金津山古墳最初の発掘成果をもたらし、これまで想像や推測のなされてきた種々の事項を大幅に修正することができた。

第2地点の確認調査 昭和62年度の上半期に芦屋市春日町150番地（1,005㎡）において、共同住宅建設計画（鉄筋コンクリート造5階建）がもち上がり、確認調査を実施した。当該地は金津山古墳墳丘部の南東隣接地に相当し、本墳を完周するとみられる周濠およびその外部施設の包蔵が予測された。

試掘調査は、昭和63年8月9日～8月11日の期間実施した。確認トレンチは敷地の略南北方向に長さ16m、幅2mの規模で設定した。掘削時にトレンチ東半部で葦石・埴輪片が認められ、水成層が堆積した不定形の落ち込みが二、三存在すること、堆積土内には遊離した葦石・埴輪片が検出されたが、トレンチの西半部では様相が一変し、周濠らしきものはおろか、落ち込み状の遺構も検出できなかった。このような状況から、本墳は円墳としての周濠が完周しないこと、逆に南面する前方後円墳の可能性が出てきたことなど、当初の予想に反した調査結果が出てきた。出土遺物では、第1地点で既出していた円筒埴輪片、朝顔形円筒埴輪片以外に新たに須恵器（陶器 TK23を上限とする杯など）が加わり、さらに古墳の改変に伴う中・近世に下る遺物も追認された〔森岡1988a〕。

以上の結果を受け、本墳の南側の状況が円墳としては不自然な向きが強くなったため、損壊を受ける部分の全面調査が必要であることを事業者に告知し、調査への協力を求めた。

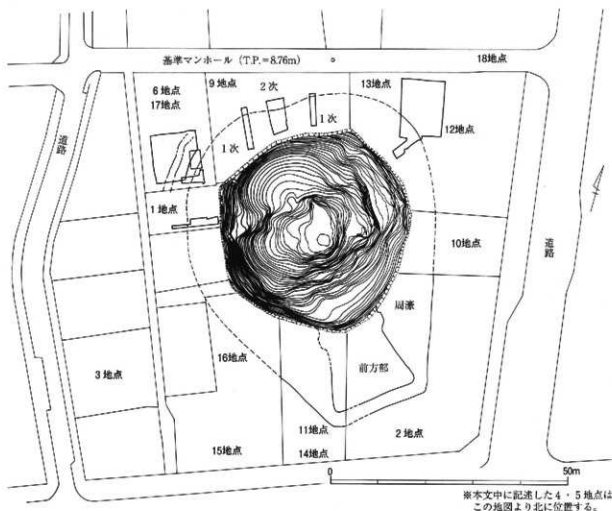
第2地点の本格発掘調査 調査は金津山古墳周濠発掘調査会と芦屋市教育委員会が主体となり、実施した。調査面積は約600㎡で、調査区全体を掘り下げた段階で、後世のたび重なる多数の遺構とともに古墳の周濠自体が大きく変化し、予想通り前方後円墳になることが判明した。その結果、本墳は主軸線をN23°Wに採り、南南東の方向に短い前方部を有する帆立貝形の前方向後円墳で、全長55m、後円部径

40m、同高さ6m、前方部長15m、同前幅20m程度の規模が推定された(第8・9図)。

前方部および周濠は、江戸時代、18世紀末の『摂津名所図会』には既に描かれておらず、この発掘調査において、鎌倉時代～室町時代にかけて削平、消失したものと推測された。近傍の打出小槌古墳もほぼ同様な時期に墳丘を失っており、翠ヶ丘台地上の翠ヶ丘古墳群の大型古墳は、中世の頃、台地面の農地開墾などにより、かなり壊されたことも判明した〔金津山古墳周濠発掘調査会1989〕。

後円部の範囲・構造確認調査 前方部の検出と周濠形態の確認によって、本墳が帆立貝形前方後円墳になることが明らかとなったが、後円部と前方部の接続状況、後円部の墳頭の埋没状況、後円部の段築成、主体部の存在形態など立体構造の面で種々未解決の問題が提起されることとなったため、平成元年度の国庫補助事業として初めて後円部の確認調査を実施した。調査は平成元年12月8日から開始され、平成2年1月30日に報道関係者に公表し、2月21日の埋め戻しをもって完了した。調査は可能な限り墳丘を損なわないようトレンチ1本の設定によって行い、第2地点との土層の連続性を追求できるように大土手の南壁の延長線を基線とし、後円部墳頂平坦面および東墳裾をカバーするもので、幅1m、全長23.3mを測る。

この調査の結果、後円部墳丘を覆う上層部分から土坑や掘り込みなどの遺構22基、墳丘の盛土工程を示す築成土A～F層を確認し、盛土A～B間において墓壇掘形を確認した。後円部の墳頭は予想以上に



第8図 金津山古墳推定復元図(1/800)

深部に遺存しており、トレンチを設定した箇所では略東西方向に後円部径42m前後に復元できる。また、墳丘の裾部平坦面に関しては、テラスではなく、畑地などの開墾によるものと判断され、段築は二段築成ではなく、三段築成になることが裏付けられた。構築方法に関しては、下段全体は地山の削り出し、上・中段はすべて盛土から成り、段築成と盛土との関係は、上段(A・B・C)、中段(D・D'・D''・E・F)、下段(基盤層の利用)である。段高については、上段部分2.4m、中段部分1.9m、下段部分1.6mを計測することが試算できた。

また、原位置を保つ葎石面や、円筒埴輪列は既に流出ないし崩壊しているため遺存せず、随所で流れ堆積による葎石の密集部が確認されている。径約10mの墳頂部平坦面の下には幅4.85mを測る墓壙掘形が検出され、その幅から複数棺の存在が想定されている。埋葬施設は用材と覚しき石材の散乱などがなく、粘土槨と予想され、さらに未盗掘の可能性も出てきた。

この調査では、墳丘部を断ち切ることによって、段築の有無、封土の築成、築造工程などの後円部の構造に関する貴重な諸成果と後円部の現況測量(空中測量)など最低限の情報を得ることができた(第7図C)〔森岡・和田・後神1990〕。

後円部周濠や周外域における確認調査の進行 第3地点の調査は、古墳そのものより20m程距離を隔てているため、金津山古墳とは無関係な弥生時代後期末の大溝(環濠要素あり)1条を検出している。当該地点は弥生時代後期～終末期の有力な集落跡と認識され、以後、「小松原遺跡」と呼称されるに至っている〔森岡・和田1990a〕。また、遺跡分布地図にも周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている〔芦屋市教委1992・2001〕

第4・5地点についても、同様に本墳墳丘より一定の距離を隔てており、水田耕作痕を中心とする古代から中世の耕作地が見出されているが、古墳関係の直接的資料は散発的に出土する円筒埴輪片以外ほとんど検出されなかった。

第6地点は、春日町156番2に所在し、鉄筋コンクリート造3階建の共同住宅建設に伴って、平成2年8月9日、8月10日に確認調査を実施した。本地点では、事業地の南東部において、後円部周濠の一部を確認した。当該地はその後本調査が予定されたが、事業が中断した後、平成2年度中に芦屋市が公取会計で先行取得した土地となり、金津山古墳の存在意義を普及啓発する「古墳埴輪館」の建設予定地として、急速市文化財保護審議会からの建議もあったところである〔森岡・和田1990b〕。平成7年1月17日の阪神・淡路大震災以後は、公共用地であったため、被災者居住用のプレハブ住宅を7棟建てて、非常事態に対応したが、包蔵地に大きな現状変更を加えるものではなかった。

第9地点は、春日町156番地1に所在し、阪神・淡路大震災に伴い、地権者が居宅(木造2階建、専用住宅)を再興するに際して、震災復興調査として事前調査を実施した。調査は確認調査を平成7年8月21日に行なった。事業地にトレンチ2カ所を設定し、両トレンチとも後円部周濠の存在を認めた。これを受け、平成7年11月13日～11月27日の期間、本調査を行った(第8・10図)。その結果は報告書のとおりであるが、後円部周濠の完周をより裏付けるものであった〔森岡・木南1996a〕。

第10地点は、春日町149番地3に所在する。地権者が鉄骨2階・地下1階建の専用住宅を新築するのに伴って事前調査を実施した。当該地は後円部東側周濠部に相当し、トレンチ1本を設定して良好な濠の断面と出土遺物を調査した〔森岡1996〕。この調査により後円部周濠の完周度はさらに高まった。

第11地点は、春日町151番地に所在する。これまでに行われてきた既往の調査で、本墳の前方部の西側半分が遺存することが判明していたため、周知遺跡内部で通常実施している確認調査は全く行わな



昭和31年刊行の『芦屋市史』本編 所載の金津山古墳
※後円部墳丘を北側から撮影したもので、北側濠を埋め立てて耕作地としている。墳丘との比高差が余りなく、耕作地にする際の嵩上げがかなりあった様子がうかがえる。



金津山古墳第1地点の調査 周濠出土の朝顔形埴輪



金津山古墳第1地点の調査 トレンチ設定状況（東に位置する墳丘から）



金津山古墳第1地点の調査 周濠検出状況
※厚さ60cmの水成層を検出し、転落した葦石や埴輪片が出土した。



金津山古墳第2地点の調査 前方部周濠の検出状況（西から）
※現存する墳丘の南東側に削平された前方部と周濠が確認された。



金津山古墳第2地点の調査 前方部周濠底より出土した円筒埴輪群

第9図 金津山古墳の既往調査（1）



金津山古墳第9地点の調査（北から）
※後門部周濠を裏づけ、多数の埴輪や甕石が出土した。



金津山古墳第11地点の
調査 周濠完掘状況
（南から）

※前方部前端では濠
幅が狭いが、くび
れ部は13mと広く
なる。



金津山古墳第11地点の
調査 甕石・埴輪出土
状況（西から）

※甕石や埴輪製の濠
内転落の状態がわ
かる。



金津山古墳第12地点の調査 周濠完掘状況（北東から）
※奥に後門部を望む。



金津山古墳第12地点の調査 周濠断面状況（東から）

第10図 金津山古墳の既往調査（2）

かった。個人住宅建設を契機とするため、平成11年度の国庫補助事業として本発掘調査を実施した（第8・10図）。調査は、平成11年12月16日に開始し、本格化したのは平成12年1月11日からである。

この調査では、西側隣接地を地権者が借地しているため、西と北を敷地ぎりぎりまで掘削の対象とし、東側は防塵・防音シートの支柱基礎の関係から、東側民地から約2.85mの間隔をあけて、土の崩壊や流出などの危険を回避出来るようにした。南側は石垣が存在する関係から、歩道面から幅約7m強の距離を隔てて調査区の南限とした。敷地の南東隅については、コンテナハウスや資材を導入するため、既に斜路を造道したため、北に後退させることになった。以上のように設定された調査区は、東西12.5m、南北17.5mの矩形に近い平行四辺形となった。

調査に際して、周濠内は座標杭による調査区全体の地区割とは別に、固有の調査区をアルファベットを用いて設定した。設定に際しては、既往調査により第2地点（前方部東側周濠）がG区までの区名を採っていたので、土地境界中間部の未掘部分をH区として割り当て、今回の調査については東からI・J・K・L・M・N・O区と呼称することとした。中世の大きな掘り直しがM・N区で入っており、南北朝時代の臨戦陣地として古墳が機能するという新しい知見が加わった。この調査は、3月14日のH区の完掘により終了した〔森岡・辻2000b・2006c〕。

第12地点は春日町149番地1に所在する。鉄骨造地上2階建地下1階建専用住宅の新築に伴って、確認調査を実施し、周濠存在域を中心に本発掘調査した（第8・10図）。事業地面積は263.63㎡、確認調査面積は12㎡、発掘調査面積は117㎡前後である。調査は平成15年12月8日に着手し、翌平成16年1月30日まで行った。第4層上面において周濠および外堤域を検出した。周濠の肩検出レベルはT.P.9.7mを測り、周濠幅がこの地点で5.9m以上、7m近くになることが判明した〔森岡・坂田2004〕。周濠の完掘を追認するとともに、その外域の重要性がさらに高まった。

第13地点は春日町149番地8に所在する。木造地上2階建専用住宅の新築に伴って届出があがったが（敷地面積165.80㎡）、第12地点のデータに基づき、慎重工事の取り扱いとした。第14地点は春日町151番地に所在する。共同住宅モデルルーム（鉄骨造地上2階建）に伴って敷地面積406.80㎡の計画を審査し、工事掘削深度が現地表下20cmのため、遺構面損傷はなきものと判断し、慎重工事の取り扱いとした。第15地点は春日町152の一部に所在する。鉄骨造モデルルーム新築により現地表下43cmまで掘削するため、平成17年6月28日に確認調査を実施した。設定トレンチは2ヶ所、現地表下58cmまで確認したが、調査範囲内での遺構・遺物の出土はなかった。第16地点は春日町152番地に所在する。578.72㎡の土地の宅地造成に伴い平成18年12月15日・18日に確認調査を実施した。確認トレンチは6ヶ所、工事による掘削深度が現地表下100cmであったので、現地表下120cmまで調べた結果、金津山の周濠埋土と考えられる砂質土の検出をみた。遺構面への影響はないと判断し、慎重工事の取り扱いとした。第18地点は春日町3街区に存在する。道路舗装のため、慎重工事とし、確認調査は実施していない。

したがって、周濠の断面状況を良好に観察できた、金津山古墳第1・2・6・9～12・16の8地点における確認調査が直接本墳の構造復元に関わることになった。

既往調査地点における外周濠の検証 なお、このたびの二重周濠が完周することを保証するには、これまでの調査地点でそれぞれ再検討が必要である。第3章第4節で既にデータが提示されているように、内側の本周濠（内周濠）と外側の付設周濠（外周濠）の底レベルは第17地点において少なくとも60cm以上の落差を伴っている。これが80cmや100cmを超える公算も高い。外周濠域全体が、内周濠検出時点で既に削平消滅していることも多くの地点で想定でき、今後に大きな課題を残している。（森岡）

第3章 発掘調査の成果

第1節 確認調査の概要

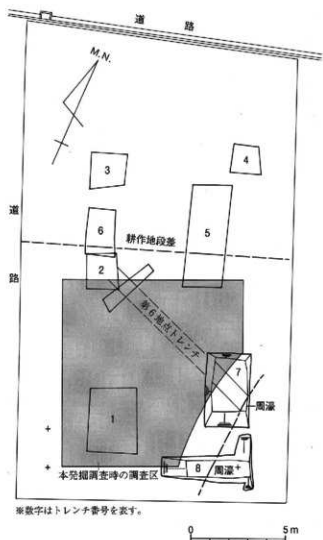
確認調査の方法 当該敷地では、平成2年（1990）8月9・10日に第6地点として確認調査を実施している〔森岡・和田1990b〕。当時の調査では、墳丘に対して直交して1本、敷地南部に東西方向に1本の計2本のトレンチを設定し、周濠の遺存を確認した（本節では、内周濠を「周濠」と表現する）。当時は周濠の確認で調査をとどめている。今回の調査では、第6地点のトレンチ2本を再掘削し、周濠の位置と埋没深度を再確認した。さらに周濠以外の遺構や、遺物包含層の有無を確認することを目的として、トレンチを合計8基設定した。このうち、第7トレンチが第6地点における斜め方向のトレンチの南東部、第8トレンチが東西方向のトレンチの東部をカバーしている（第11図）。

掘削面積は、計23.5㎡になる。各トレンチで盛土や水田耕作土を重機（0.1㎡）で除去した。第5トレンチでは、中世耕作土から人力で分層発掘を行い、遺物を3段階に分けて取り上げた。工事掘削深度が耕作面に達しない第2～4トレンチは、底面を約0.2～0.5㎡深掘し、耕作面の深度を確認した。第7トレンチは盛土と旧トレンチ埋土を重機で掘削し、周濠の肩を検出した。第8トレンチは、旧トレンチ埋土のみ重機で再掘削し、周濠埋土を検出した。

写真撮影は、35mmカラーネガフィルムとデジタルカメラを併用した。記録図面は、平板でトレンチ配置図および遺構図を、第3・5・8トレンチの土層断面図を1/20で作成した。また、すべてのトレンチで土層柱状図を作成した。

調査経過 確認調査は、平成19年（2007）7月17日（火）に開始し、7月27日（金）に終了した。実働は8日である。以下に調査経過を記す。

2007年7月17日より調査開始、現場設営。第1トレンチは盛土と近現代耕作土、大阪層群を確認し、調査完了。第2トレンチは重機掘削。7月18日、第2～4トレンチの重機掘削。掘削深度が盛土内におさまることから、壁際を深掘した。掘削深度直下で近現代耕作面を検出。また、北側の第3・4トレンチと南側の第2トレンチ間の耕作

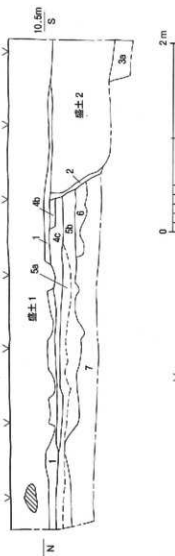


第11図 トレンチ配置図および確認調査遺構平面図（1/200）

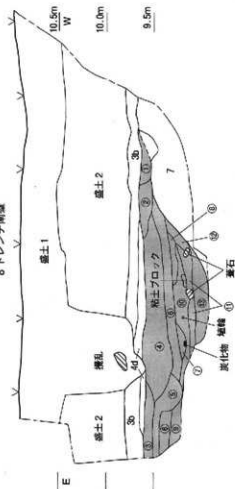
3 トレンチ西壁



5 トレンチ東壁



8 トレンチ商壁



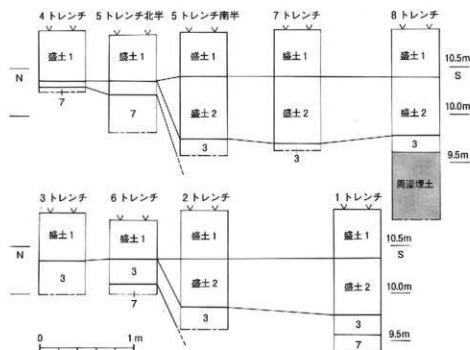
第12図 確認調査土層断面図 (1/40)

【十部集注】

- [illegible]

【置座】

- 試料名: 1. オリブ褐色 (2.5YR 6/6) の他、白色 (5YR 7/1)、茶褐色 (5YR 7/2)、茶褐色 (5YR 7/3)、茶褐色 (5YR 7/4)、茶褐色 (5YR 7/5)、茶褐色 (5YR 7/6)、茶褐色 (5YR 7/7)、茶褐色 (5YR 7/8)、茶褐色 (5YR 7/9)、茶褐色 (5YR 7/10)、茶褐色 (5YR 7/11)、茶褐色 (5YR 7/12)、茶褐色 (5YR 7/13)、茶褐色 (5YR 7/14)、茶褐色 (5YR 7/15)、茶褐色 (5YR 7/16)、茶褐色 (5YR 7/17)、茶褐色 (5YR 7/18)、茶褐色 (5YR 7/19)、茶褐色 (5YR 7/20)、茶褐色 (5YR 7/21)、茶褐色 (5YR 7/22)、茶褐色 (5YR 7/23)、茶褐色 (5YR 7/24)、茶褐色 (5YR 7/25)、茶褐色 (5YR 7/26)、茶褐色 (5YR 7/27)、茶褐色 (5YR 7/28)、茶褐色 (5YR 7/29)、茶褐色 (5YR 7/30)、茶褐色 (5YR 7/31)、茶褐色 (5YR 7/32)、茶褐色 (5YR 7/33)、茶褐色 (5YR 7/34)、茶褐色 (5YR 7/35)、茶褐色 (5YR 7/36)、茶褐色 (5YR 7/37)、茶褐色 (5YR 7/38)、茶褐色 (5YR 7/39)、茶褐色 (5YR 7/40)、茶褐色 (5YR 7/41)、茶褐色 (5YR 7/42)、茶褐色 (5YR 7/43)、茶褐色 (5YR 7/44)、茶褐色 (5YR 7/45)、茶褐色 (5YR 7/46)、茶褐色 (5YR 7/47)、茶褐色 (5YR 7/48)、茶褐色 (5YR 7/49)、茶褐色 (5YR 7/50)、茶褐色 (5YR 7/51)、茶褐色 (5YR 7/52)、茶褐色 (5YR 7/53)、茶褐色 (5YR 7/54)、茶褐色 (5YR 7/55)、茶褐色 (5YR 7/56)、茶褐色 (5YR 7/57)、茶褐色 (5YR 7/58)、茶褐色 (5YR 7/59)、茶褐色 (5YR 7/60)、茶褐色 (5YR 7/61)、茶褐色 (5YR 7/62)、茶褐色 (5YR 7/63)、茶褐色 (5YR 7/64)、茶褐色 (5YR 7/65)、茶褐色 (5YR 7/66)、茶褐色 (5YR 7/67)、茶褐色 (5YR 7/68)、茶褐色 (5YR 7/69)、茶褐色 (5YR 7/70)、茶褐色 (5YR 7/71)、茶褐色 (5YR 7/72)、茶褐色 (5YR 7/73)、茶褐色 (5YR 7/74)、茶褐色 (5YR 7/75)、茶褐色 (5YR 7/76)、茶褐色 (5YR 7/77)、茶褐色 (5YR 7/78)、茶褐色 (5YR 7/79)、茶褐色 (5YR 7/80)、茶褐色 (5YR 7/81)、茶褐色 (5YR 7/82)、茶褐色 (5YR 7/83)、茶褐色 (5YR 7/84)、茶褐色 (5YR 7/85)、茶褐色 (5YR 7/86)、茶褐色 (5YR 7/87)、茶褐色 (5YR 7/88)、茶褐色 (5YR 7/89)、茶褐色 (5YR 7/90)、茶褐色 (5YR 7/91)、茶褐色 (5YR 7/92)、茶褐色 (5YR 7/93)、茶褐色 (5YR 7/94)、茶褐色 (5YR 7/95)、茶褐色 (5YR 7/96)、茶褐色 (5YR 7/97)、茶褐色 (5YR 7/98)、茶褐色 (5YR 7/99)、茶褐色 (5YR 7/100)。



第13図 確認調査土層柱状図 (1/40)

面に70～80cmの高
低差を確認した。
7月19日、第1～
4トレンチの埋め
戻し、第5トレン
チの掘削。東西方
向の耕作地段差に
より、南半部を先
に重機で掘り下げ、
北半の耕作土につ
いては人力で分層
発掘を行うことに
した。第5トレン
チ東半部で中・近
世の耕作土下面で
精査したが、明確

な遺構は検出できなかった。7月20日、第5トレンチの人力掘削。また西側での耕作地段差を確認すべく、第6トレンチを設定。第5トレンチの西半についても明確な遺構は認められず、東壁際に断削を行い、第5・6トレンチを埋め戻す。事業者2名が見学。7月24日、本格的に梅雨明け。第6地点の旧トレンチ2本の位置確認を4ヶ所で行う。旧トレンチは地表から深さ40cmまでの盛土1より下、耕作地段差を埋める盛土2の上面で検出された。周濠に直交する斜め方向の旧トレンチに重複させて、矩形の第7トレンチを設定。耕作土直下で大阪層群と、南東部で灰色の粘質土を検出した。市文化財保護協力者の藤川氏来跡、事業者1名が見学。7月25日、第8トレンチを設定し、旧トレンチ内埋土を重機掘削。攪乱を受けていない土層、周濠肩部や葺石の遺存を確認した。第7トレンチの灰色粘質土は、周濠埋土であると判断し、第8トレンチとあわせて周濠ラインの復原が可能となった。午前10時に、芦屋市文化財保護審議会の多淵委員、午後2時に村川委員・神木委員が現場を視察された。藤原教育長、松本社会教育部長、川崎社会教育部次長、大橋生涯学習課（文化財担当）課長補佐、森岡同課主査が同席。7月26日、第7・8トレンチともに全体写真を撮影する。第8トレンチは縮尺1/20の上断面図を作成。現場に坂田囃子・天羽調査補助員来跡。7月27日、第8トレンチ周濠埋土内から埴輪片2点出土。調査区を埋め戻し、器材の搬出を済ませた。本日で現地における調査を終了する。

層序 現表土直下には、褐色系砂質土（盛土1）や明黄褐色砂質土（盛土2）といった宅地造成に伴う厚い盛土が存在していた。その盛土下で、1～7層が確認された。1層は近現代の耕作土、2層は盛土2に伴う造成土で、それより以前に堆積した土層について、以下に概述する（第12・13図）。

3層：オリーブ黒灰色粘質土層。炭化物や鉄分あり。近代以降の耕作土。敷地全体に広がっている。

4層：オリーブ褐色系の砂質土層。鉄分の沈着が強く見られた。近世耕作土。全体に広がっている。

5層：4層と同じくオリーブ褐色系の砂質土層。鉄分の沈着が強く見られた。中世～近世の遺物の包含が認められ、同時期の耕作土である。敷地北半で確認された。

6層：中世～近世の遺物の包含が認められた。中世～近世の耕作痕の埋土である。

7層：耕作土下で検出された無遺物層で、翠ヶ丘台地の基盤を形成する大阪層群。ただし、大阪層群起源の二次堆積層だとも考えられる。シルト質や花崗岩風化土を多く含んでいる部分が見られるなど、異なった様相が観察できるが、全体的には浅黄色や灰黄色・灰白色を呈している。

各土層の堆積状況は、近世以降の耕作地段差に起因して、敷地北半と南半で大きく異なる（第13図・図版2）。盛土1は敷地全体に約40cmの厚さで盛られている。敷地南半部のみ確認された盛土2は、層厚約80cm 測り耕作地段差を解消している。北半部に設定した第3・4トレンチと中央部に位置する第5・6トレンチの北部では、盛土1の下に3～5層が確認された。第5・6トレンチの南部と南半部に設定した第1・2・7・8トレンチでは、盛土1・2と7層の間に3・4層しか確認できず、中世耕作土は削平されたと考えられる。なお、周濠埋土内の土層は、○囲い数字で表した。

遺構 今回の確認調査では、金津山古墳の周濠と、中・近世の耕作痕が検出された。近世以降のものとしては、調査地中央付近で南北に高低差をもつ耕作地段差が認められた。

第7・8トレンチから後円部の堤側の周濠層が検出された。周濠は7層を基盤として、断面はすり鉢状に成形されている。検出幅は3m、深さは80cmにとどまり、今回の調査では周濠の最深部や、墳丘側の肩は確認できていない。ただし、第8トレンチで観察された断面形態から、最深部に比較的近い位置まで観察できているものと思われる。この周濠に伴ない、数点の葺石が堤側の埋土下部から集中して出土した。おおよそ15～30cmの花崗岩円礫で、既往調査のものと同様である。また、⑩層から埴輪片2点、土師器片1点が出土した。なお、土層観察の結果、⑦層や⑤層については、断面形態や他の周濠埋土とは明らかに異なる土質であることから、何らかの遺構が存在した可能性がある。また、今回設定したトレンチからは、外周濠および、周堤帯のような遺構は認められなかった。

金津山古墳周濠以外の遺構としては、調査地北半部7層上面において中世～近世の耕作痕が検出された。近世以降のものとしては、第5・6トレンチを結ぶ東西ラインで、北側が高く南側が低い耕作地段差を確認した。当段差の最終面直上には近代以降の耕作土である3層が堆積しており、宅地造成まで機能していたものであろう。当段差の高低差は約70cmを測り、段差北側の3層上面の標高が10.4m前後、段差南側の同層上面の標高が9.7m前後となっている。この耕作地段差は自然地形に即して設けられており、盛土2によって高低差が解消されている。この盛土からは、遺物の出土は見られない。

なお、東側との隣地境界には南北方向に生垣があり、第6地点の旧トレンチ東端は検出できなかった。

遺物 今回の調査では、27ℓ容量のコンテナ1／4箱分の遺物が出土した。埴輪・土師器・須恵器・青磁・陶器・染付磁器・瓦等で、そのほとんどが近世以降の小片であった。耕作土である3層からは、煉瓦の他に、東播系須恵器、近世の陶器・染付磁器などが出土している。4層からは埴輪片、近世の陶器・染付磁器などが出土。5・6層からは、中世の土師器・須恵器・青磁・陶器、近世の染付磁器が出土している。中世の遺物の出土量は少ない。

周濠埋土では、⑩層から円筒埴輪片が2点出土した。図化した埴輪は内面が剥離しているものの、ナデ痕跡が認められ、残存器厚は8mm程度である（第14図）。軟質の焼き上がりから外面調整はわずかにヨコハケが残る程度で突帯もかなり摩滅している。現状で断面はふくらみをもった三角形を呈しているが、もともとは既往調査で見られるようなM字突帯を貼り付けていた可能性もある。石英や長石の混じりが多い。なお、周濠埋土からは埴輪以外に土師器片が1点、第5トレンチからも埴輪片が出土している。

（守田めぐみ）



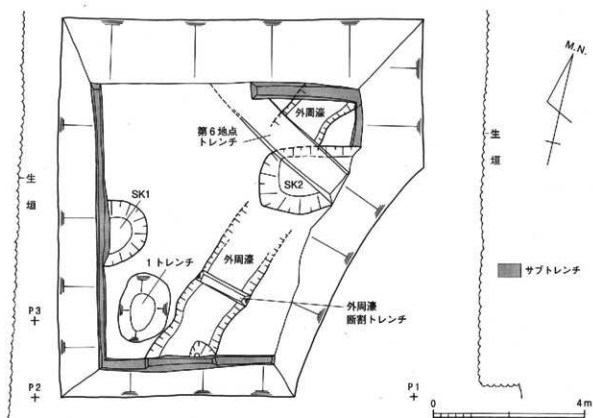
第14図 埴輪実測図（1／4）

第2節 本発掘調査の方法

前節で述べたように、当該地南東端に金津山古墳の周濠が遺存していることが判明したため、周濠を保存するために、建築計画は周濠の西肩部から3m控えた位置に建物の基礎杭を設置するように変更された。しかし、確認調査トレンチの及ばなかった部分については、依然、地山直上において、中世の耕作痕や水利に関わる遺構および金津山古墳に伴う外堤や外周濠の存在が否定できないことから、建物の基礎工事に伴う掘削が地山に達する範囲を対象として本発掘調査を実施した。当該地北部では現地表面下50cmほどで地山が検出されているが、掘削深度が浅くて盛土の範囲に収まるので調査対象からはずし、掘削深度が地山に達する当該地南部に調査区を設定した。ただし、安全面に考慮して南端を隣地境界から2m控えて調査区を設定した。また、調査区東辺南部は周濠の西肩を反映して弧を描いているため、調査区は南北10.0m、北辺9.5m、南辺6.0m、総面積84m²の変則的な形態となった(第15図)。

掘削作業は、表土と盛土を重機掘削してから、耕作土以下地山面直上まで人力掘削した。この際の排土は全て場内に仮置きし、調査後には、遺構面を保護するために砂を入れてから排土で埋め戻した。

記録は実測図(平面図・土層断面図)を作成するとともに、写真と映像を撮影した。調査区南辺の延長上に10m間隔で杭P1とP2を設定し、さらにP2から北に2mの位置にP3を設けて基準とし、光波測距器を用いて平面図を作成した。また、本市道路課設置のマンホール上面基準高(T.P.8.76m)から水準測量により得た数値を基準高とした。写真は、デジタルカメラと、初めは35mmカラーネガフィルムを、外周濠が確認できてからは35mmの白黒・カラーポジフィルムを用いて撮影した。(白谷)



第15図 調査区平面図 (1/100)

第3節 基本土層

調査区では、確認調査時に確認していた灰色粘性砂質土（3b層）が全域に広がっていたのでこの層を1層とし、調査区西壁で検出した土層を基本土層として土層番号や土層名を付した。ただし、1層より上の盛土や現表土は土層番号を付さず、「盛土」・「現表土」と表記し、1層より下の包含層は上から順に2層、3層と番号を付けた。調査区西壁では金津山古墳の外周濠は観察されなかったが、他の壁面でも外周濠埋土が確認できたので、アルファベットを用いて表記している。また、調査区北東部では基本土層にも外周濠埋土にも該当しない土層が見られたので、これらは4～7層とした。なお、地山の大版層群は土質の違いを考慮して、「地山1」と「地山2」に分けた。土色は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）に準じた（第16図・図版4）。

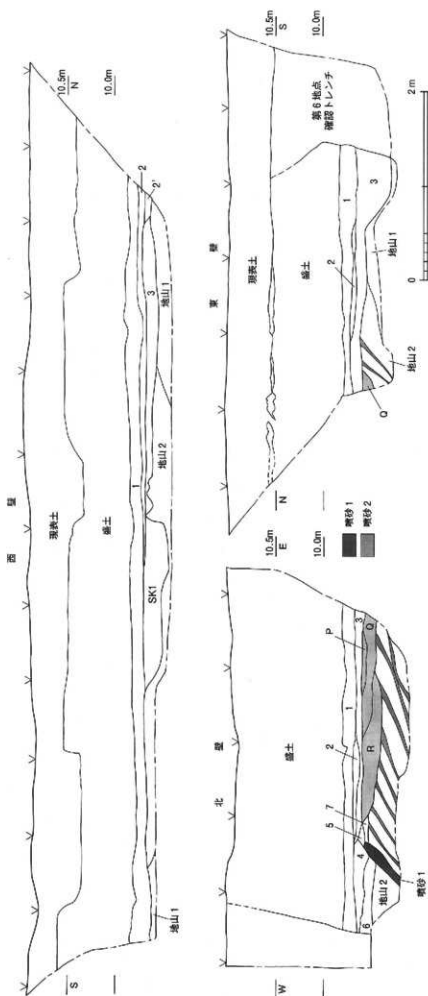
腐植土である現表土の下は、厚さ100～120cmの盛土で、当該地で大々的な嵩上げが行われたことがわかる。この盛土は大版層群を起源としており、地山1や地山2に似たブロックで構成されるが、遺物は見られない。近在の丘陵から掘り出したものと推測できるが、調査区の北方130mを走る国道2号線の昭和2年（1927）段階の拡幅工事において、掘開された土と考えることも出来よう。

盛土の直下は1層である。1層は、層厚15～20cmの灰色粘性砂質土で、土質から耕作土といえる。この層からは、近世後半から近代にかけての陶器・磁器・瓦・ガラス・金属器などが出土しているが、プラスチックやナイロンといった石油製品を含まないことから、耕作土としての下限は戦前と考える。

2・3層は、調査区北部に広がっていた土層である。2層は層厚10cmほどの黄灰色粘性砂質土であるが粘性はやや弱い。明黄褐色粘土や黄灰色粘土の小ブロックを含むが、遺物は見られない。調査区北西端のみ、2層より下に、2層よりシルトが主体で粘性の弱い黄灰色シルト質土（2'層）が確認された。3層は、1層に酷似する灰色粘性砂質土で、層厚は10～30cmである。出土遺物は陶器・磁器・瓦片・鉄製品等で、1層より江戸時代後半のものの比率が高いが、近世から近代にかけての耕作土といえよう。2層との層界には雨水により流入した砂がみられることから、2層が耕作面を嵩上げするための盛土と考えられる。なお、SK1やSK2の埋土もこの3層である。

4～7層は、いずれも自然堆積層で、無遺物層と見られる。4層はにぶい黄橙色～明黄褐色粗砂、5層は浅黄色中砂で、後述する噴砂より新しい自然堆積層である。一方、6層は灰白色～淡黄色細砂～中砂、7層は明黄褐色細砂で、噴砂より古い自然堆積層である。ややしまりが悪いので、大版層群とは考えられない。5・7層は外周濠に切られており、4・6層も外周濠に先行する可能性が考えられる。

地山は、調査区南部では1層直下で、北東部を除く調査区北部では3層直下で、北東部では6・7層直下で検出されている。地山1は灰白色シルト、地山2は細砂～粗砂で成っており、いずれもしまりがよい。地山2はラミナ状堆積であるがとくに堅くしまっており、鉄分の沈着により褐色の縞を呈する部分がある。さらに、地山2の範囲に限って噴砂が顕著に見られる。この噴砂は、高さ40cm以上確認でき、調査区北東部を中心に地山2が縦横無尽に引き裂かれていることから、地震の規模の大きさがしのばれる。噴砂の多くは、灰白色粗砂～細砂で下位ほど粒子が粗い傾向があるが、中には灰色粗砂～中砂で構成されるものもある。噴砂は周濠の構築によって上部を削り取られているので、古墳築造以前の地震によるものであることが分かる。寒川旭氏の研究に拠ると、六甲南麓では弥生時代後期の大地震が想定されているので、その地震に相当する噴砂の可能性が指摘できよう（寒川2007）。（白谷）



- 現状土：新粘土。一部互を含み増量あり。
 盛土：大塚層群を起源としており、地山1や地山2に似たブロックで構成される。
 1：灰白色 (5/4/1) 粘砂質土 埋設管埋設時の3b層に相当する。近世～近代にかけての耕作土。
 2：黄灰色 (2.5/6/1) 粘砂質土 粘性はややく、3層上に雨水により浸入した砂が混じる。明黄褐色 (2.5/6/6～2.5/6/8) 粘土ブロックや黄灰色 (2.5/4/1) 粘土の小ブロックを含む。
 2'：黄灰色 (2.5/6/1)～2.5/5/1) シルト質土 粘性は強く、2層よりシルトが主体である。
 3：灰白色 (5/4/1) 粘砂質土 1層に類似する。
 4：にじみ黄褐色 (10/6/2/4)～明黄褐色 (10/6/2/6～10/6/6/6) 粗砂 噴砂より細かい自然堆積層。
 5：淡黄色 (2.5/7/4) 中砂 噴砂より細かい自然堆積層。
 6：灰白色 (5/6/2)～淡黄色 (5/6/3) 粗砂～中砂 噴砂より古い自然堆積層。
 7：明黄褐色 (10/6/2/6) 粗砂 噴砂より古い自然堆積層。
 P：灰黄色 (2.5/7/2)～明黄褐色 (2.5/7/6) 粘土 外周深埋土上層。
 O：にじみ黄褐色 (10/6/3)～明黄褐色 (10/6/4)～淡黄色 (2.5/7/3) 粗砂～中砂 外周深埋土下層、やや堅い。
 R：淡黄色 (2.5/6/4)～黄色 (2.5/6/6)～明黄褐色 (10/5/1/6) 粗砂～中砂 外周深埋土下層部。しおりの多い水浸持層。
 地山1：灰白色 (7.5/8/1) シルト しおりが多い。
 地山2：灰白色 (2.5/6/1)～淡黄色 (2.5/6/3) 粗砂～粗砂 しおりが非常に多い。堆積に特色 (7.5/6/4/6) を呈する。
 噴砂1：灰色 (7.5/6/1)～7.5/4/1) 粗砂～中砂
 噴砂2：灰白色 (6/6/0)～2.5/6/1) 粗砂～粗砂

第4節 遺構

本発掘調査で確認した遺構面は、地山上面の一面のみである。この面ではSK1・SK2と金津山古墳の外周濠を検出した。このうちSK1・SK2は、3層（近世から近代にかけての耕作土）を埋土としており、近世から近代にかけての遺構である。一方、外周濠は、1層や3層の下位に確認されており、耕作土造成時に外周濠も削平されたことがわかる。以下、個々の遺構について概略を述べる（第15～19図・図版3～7）。

SK1は、調査区中央部西端で検出した遺構で、さらに調査区外に広がっている。調査区内における平面形は、半径90cmの半円で、地山を掘りこんだ断面形は浅い皿状である。深さは20～25cmで、北側が少し深い（第15・16図）。SK1からは、江戸時代後期から近代の陶器・瓦片・鉄製品が出土している。通有の生活雑器の中に、箱庭用のミニチュア製品も見られる。

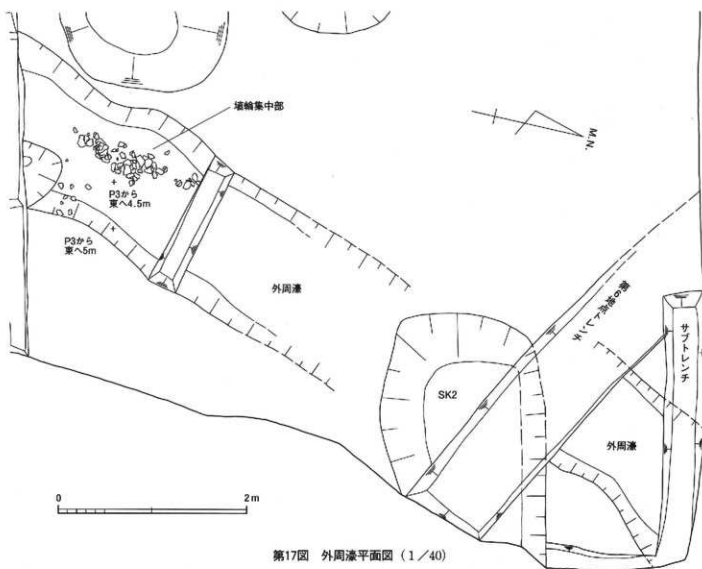
SK2は、調査区北東部で検出した遺構で、調査区北東にのびている。調査区内における平面形は、東西200cm、南北150cmの隅丸方形に近い形状である。SK2の深さは35cm程度で、断面形が逆台形を呈しており、底面は平らである（第15図）。SK2の下には本来外周濠が位置していたはずであるが、SK2の掘削が地山に達しているため、外周濠は全く残存していなかった。このため、SK2を横切る位置に設定された第6地点トレンチでは、外周濠の存在が確認できなかった。SK2出土の遺物は、碗や皿、土鍋の蓋などの陶器・磁器片と瓦片で、江戸時代後期から近代のものである。

SK1とSK2は、形態はやや異なるものの、耕作土を埋土としており、耕作地と未分化である様子から、耕作に伴う遺構と考えられる。具体的には、水溜めや野壺が想定できる。

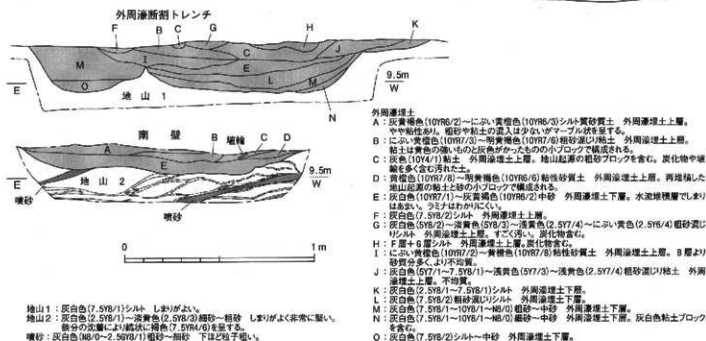
外周濠は、まず、調査区南壁からSK2の間に広がる地山1上面で確認された。当初は中世の耕作に関わる溝とも考えたが、遺物が古墳時代の円筒埴輪に限定されることから、古墳時代の遺構（外周濠）であると判断した。さらに、SK2以北の地山2上面について、精査と土層の検討を繰り返したところ、南側とはやや埋土の色調が異なるものの、その続きが確認された（第17・18図・図版3～7）。

外周濠は、後世に上部が大きく削られているので本来の規模は不明であるが、残存幅は約1.5～1.8m、深さは約0.2m、検出長は約8mを測る。外周濠は南南西—北北東の方向を示す緩やかな円弧を描いており、現状では内周濠から約4.5m外側にほぼ並行している。ただし、内周濠と外周濠の間に存在していたと考えられる中堤は、耕作地の開発によってすでに削平されているので、本来の内・外周濠の間隔はもっと狭かったと推測できる。なお、外周濠の検出面の高さは標高9.6mで、確認調査8トレンチで確認された内周濠の基盤面の高さが標高9.7mであるので、両周濠はほぼ同様の標高で検出されていることから、削平状態に大差はないと言える。このことから、幅3m以上、深さ0.8m以上ある内周濠より外周濠の方が明らかに幅が狭くて浅いことがわかる。ちなみに断面形態は、内周濠がすり鉢状であるのに対し、外周濠は浅い皿状を呈している。また、外周濠底面の標高は概ね9.4～9.5mである。ただし、南壁沿いの東寄り部分はポットホールで一段深くなっていたり、第6地点トレンチの南側における濠底面の高さが9.6mと浅くなっていたりするので、一概に地形に則して南傾するとは言えない。

外周濠埋土については、南壁沿いとおび東壁沿いにサブトレンチを設けて土層観察を行うとともに、南部に断割トレンチを設けて土層断面図を作成した（第16・18図・図版4・6）。この結果、南部と北部では地山の影響によって色調やしまり具合に違いはあるが、いずれの部分でもレンズ状堆積



第17図 外周濠平面図 (1/40)



第18図 外周濠土層断面図 (1/20)

が認められるとともに、土質の違いから上層と下層の二つに分けられた。土層名は、断割トレンチを基準としてアルファベットで表記しているが、断割トレンチの上層と対応しないものには異なる土層名を付している（第16・18図A～R層）。上層は、不均質で汚れた粘土質のもので、炭化物や埴輪、地山起源の粘土や砂のブロックを含む。濠底が滞水状態の段階で形成された水成層と考えられる。上層に含まれるのは、A・B・C・D・F・G・H・I・J・P層で、層厚は10cm弱である。一方、下層は、ラミナは明確ではないものの水流堆積によるとみられるしまりのあまい砂層で、層厚は20cm程度である。下層に相当するのは、E・K・L・M・N・O・Q・R層で、南壁沿い東寄りのポットホルの埋土であるM・O層も下層に含まれる。これらは、外周濠掘削から間を置かずに流入したものと考えられる。

外周濠からは埴輪片が出土しているが、その分布域は断割トレンチ以南に限られていた。しかも、西屑に沿う南北約1.1m、東西0.4mの範囲（以下、「A群」と呼称する。）と、A群より0.2m北で、断割トレンチのすぐ南側（以下、「B群」と呼称する。）、東寄りのポットホルの北側（以下、「C群」と呼称する。）に集中する傾向がある。これらの埴輪はいずれも軟質の土師質焼成で、土中における劣化が著しく、器面の状態はきわめて悪い（第19図・図版7）。

A・B群は、比較的大きな破片が多く、約100点の破片が確認されている。いずれも円筒埴輪片で、大半が内面を上にして出土している。検出レベルは9.63～9.56mで、概ね9.61mレベルに集中しており、出土層位もC層に限定されるなどまともは良く、一括性は高いと考えられる。A群の南寄りに



第19図 埴輪出土状態平面図（1/10）

は、円筒埴輪の基底部から最下段の突帯付近の破片が集まっていた（第19・20図8）。中央からやや北寄りには、円筒埴輪の口縁部が確認されているが、端部の形態が異なることから、複数個体の存在が推定できる（第19・20図1・2）。また、外面を上に向けて出土した破片は、内面を上にして出土したものと接合関係を有するものがなく、微妙に胎土も異なるので、別個体と見ておく。さらに、B群から出土したものは、胎土や色調が他の破片とはかなり異なっており、A群とは別個体の可能性が高い（第19・20図14・15）。このように、A・B群は複数個体の埴輪によって構成されていると考えられる。

一方、C群には10点ほどの破片が見られるが、A・B群と比べると破片が小さく、散漫である。また、検出レベルは9.64～9.61mで、A・B群より若干高い。第19・20図11のような突帯部分の破片があり、A・B群を構成する埴輪とは別個体と考えられる。

これらの埴輪片は、おそらく本来中堤や外堤に樹立していたものが、古墳の荒廃により周濠内に横倒しになって埋没したものか、空壕底に設置された埴輪円筒棺等の一部と考えられる。ただし、本来はより多くの部材を伴っていたはずのものであるが、濠の削平によってその多くを失っているため、どちらとも断言できない。（白谷）

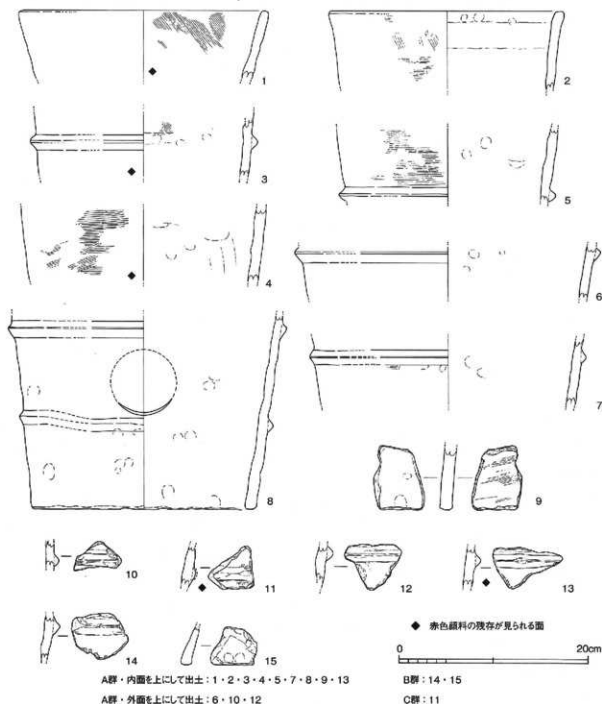
第5節 遺物

本発掘調査では、第3節で述べたように、1・3層から近世後半から近代の陶器・磁器・瓦・ガラス・金属器等が出土しているが、金津山古墳に係るものは、3層から出土した準大の古生層系の円礫1石が、僅かに葺石の可能性を有するのみである。また、第4節で述べたように、外周濠から出土した遺物は埴輪のみで、古墳祭祀に伴う土師器、須恵器や葺石は確認されなかった。さらに、周辺遺跡の調査で確認されている弥生土器や古代の土師器、須恵器、中世の須恵器や瓦質土器・陶器・磁器等は全く出土しておらず、調査地点における耕作地造成時の削平が徹底したものであったことがうかがえる。ここでは、近世から近代の遺物についての記述は省略し、外周濠から出土した埴輪についてのみ記述する。なお、埴輪の色調は、肉眼観察による観察色とともに、『新版 標準土色帖』に基づいた土色を用いて記している。

外周濠から出土した埴輪は、いずれも円筒埴輪片で、乳白色から灰白色や象牙色を呈するきわめて軟質の土師質焼成である。残存率が低く、完形に復元できるものはないため、15点を図化することができたものの、復元径にはかなりの憶測が含まれる（第20図・図版8-1～15）。どの破片も器面の保存状態が悪く、調整技法の観察は困難である。ただし、1・3・4・11・13は、器面に赤色（10R4/8）に発色している赤色顔料の塗布が観察できるので、実測図に◆印で彩色面を示している。

これらの胎土は、花崗岩風化粒である長石や石英とシャモットの混和材を少量含む良質の粘土であるが、出土状態や胎土に含まれる砂粒の多寡、色調の検討から、A群で内面を上にして出土した埴輪は、1・3・4・9・13と2・5・7・8の2つのグループに分けられた。また、6・10・12は外面を上にして出土したものである。14・15はB群、11はC群に属する。

1・3・4・9・13の胎土は緻密な粘土で砂粒の混入が少なく、浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。1は直線的に立ち上がる口縁部で、端部は丸みを帯びた平坦面を有する。内面にはタテハケ（6本/cm）が認められる。同一個体とみなした3は内面に僅かながらタテハケが残っている。4は内面にユビナデ・ユビオサエ、外面にヨコハケ（6～7本/cm）が見られる。原体の幅は狭く、複数周施されている



第20図 埴輪実測図 (1/4)

ことはわかるが、静止痕跡は観察できなかった。3や13の突帯は細目で、幅1.4～1.5cm、高さ0.6cmであるが、磨滅のために断面形が三角形に近くなっている。基底部の9はあまり肥厚せず、端面は平坦である。外面にはヨコハケ（6～7本/cm）が見られ、ヨコハケの方向の違いから複数の周回であることがわかる。

2・5・7・8の胎土も緻密な粘土であるが、1・3等より微細砂粒の混入が少し多くてややざらざらした質感があり、淡黄色（2.5Y8/3）を呈する。2は直線的に立ち上がる口縁部で、端部はヨコナデによってやや反気味に屈曲している。外面に一次調整のタテハケ（5～6本/cm）を施した後、二

次調整のヨコハケ（6～7本/cm）が見られる。5・7は外面にヨコハケ（6～7本/cm）が残っている。かすかに直立した静止痕が認められる。8は、基底部から2条目突帯までが残る破片で、下から2段目に円形の透し孔が確認できる。基底部端部から1段目の突帯上部までの底部高は10.4cm、1段目の突帯上部から2段目の突帯上部までの2段目突帯間は9.5cmを測る。この個体も基底部に顕著な肥厚は見られず、端面は平坦である。このグループの突帯は幅1.1～1.5cm、高さ0.5～0.8cmで、比較的に残りのよい5の断面形は上辺の狭い台形に近く、他は三角形に近いが、磨滅前の本来の断面形はおおむね5のような形状であったと考えられる。ただし、8の最下段突帯は磨滅が顕著でないにも関わらず断面形が三角形を呈しており、あるいは基部として埋め殺す部分の突帯については、このような省略が行われていたのかもしれない。

6・10～12・14は、いずれも突帯を有する破片である。このうち、C群に属する11は淡黄色（2.5Y8/3）を呈する破片で、突帯幅が1.9cmと他の破片より若干広い。他の破片は、浅黄橙色（7.5YR8/4～10YR8/3）を呈しており、内面を上にして出土したものと大差はない。突帯幅が1.3～1.8cm、高さは0.5～0.7cmと細目で、磨滅によって断面形は三角形に近い形状を呈しているものの、上端部の突出が下端部よりやや大きく、突帯面が下方すばまりに傾く傾向が看取できる。15は基底部の破片である。浅黄橙色（10YR8/4）～淡黄色（2.5Y8/3）を呈しており、他の破片と比べるとやや胎土がさくく、焼成状態は良い。8・9と同様に、基底部に顕著な肥厚は見られず、端面は平坦である。

このように、外周濠から出土した埴輪は、普通円筒埴輪と考えられるものばかりである。いずれも薄手で、基底部に至っても肥厚しないなど、いくつかの共通点が見られる。器面調整については、外面は一次調整タテハケの後、二次調整のB種と見られるヨコハケである。内面は、ユビナデやユビオサエに加えてタテハケが見られる。突帯は上端部の突出が下端部よりやや大きく、突帯面が傾く山形を指向するようである。なお、突帯間隔設定技法は観察不能であった。

ところで、既往調査における金津山古墳の円筒埴輪を観察すると、土師質焼成、半須恵質焼成、須恵質焼成と焼き上がりには格差があり、黒斑を有するものも僅かながら見られる。4条突帯5段構成が主体を占めており、高さは45cm程度で最上段と最下段（底部高）は10cmを超えるものの、他の段の突帯間は8～9cm程度と狭い。これは、伊丹市の御願塚古墳の埴輪にも通ずる傾向である〔中畔・小長谷・瀬川2008〕。ただし、直径について見ると金津山古墳の円筒埴輪は口径25～32cmで、大形品・中形品によって構成される御願塚古墳の埴輪とは異なる。突帯幅は1.0～1.7cmと狭いものが多く、突出は0.5～0.8cm程度である。断面形態は台形に近いが、上端部の突出がやや大きく、下端部の突出が小さいため、突帯面が下方に向かってすばまる傾向があり、中には断面が三角形に近いものも見られる。突帯上面はヨコナデ仕上げで、凹線状を呈するものもある。外面調整は、おおむね一次調整がタテハケで、二次調整はB種ヨコハケである〔一瀬1988・2003、一瀬・十河2008〕。ヨコハケのストロークは短く、原体幅が狭いため、突帯間を複数周で充足するBa種に似たものやBb種も多く、Bc・Bd種と併存する。土師質焼成のものは、直立静止痕が不明瞭で、僅かに横位のハケメのぶれによってその存在がわかる程度のものが多い。須恵質焼成のものには、斜めに傾く静止痕と、A種に似たヨコハケを併用したのが見られる。なお、最上段については、B種ヨコハケの後にその上半分に最終調整としてタテハケを施したものが一定量含まれている。内面調整はユビオサエやユビナデが多いが、タテハケも若干見られる。

このような資料と今回出土した埴輪とを比較すると、焼成状態、突帯形態、法量、器面調整等が類似しており、同一時期の所産とみて矛盾しない。（白谷）

第4章 まとめ

第1節 金津山古墳の墳形・規模・年代

金津山古墳の墳形については、従来の調査によって、短小な前方部を有する帆立貝形の前方後円墳(帆立貝形古墳)であり、その周りに馬蹄形の内周濠が巡ることが明らかになっている。具体的な墳丘規模は、全長55m、後円部径42m、前方部長13m、前方部前幅18mを測る。前方部については、すでに削平されているためその本来の高さを知ることができないが、東側のくびれ部付近から器台や壺などの須恵器がまとまって出土しており、造出しの存在が推定されている〔森岡1995〕。後円部については、現在の墳頂が標高15m程度で、その高さは6.0~6.6mと考えられる。段築成については、後円部の範囲確認調査時の所見から、後円丘三段築成と推定されている〔森岡1990、森岡・和田・後神1990〕。内周濠の規模は、後円部を巡る部分の幅は6~8m、くびれ部で13m、前方部前幅の幅が3mで、北西から南東の最大長が約70m、北東から南西の最大幅が約50mを測る。さらに、今回新たに後円部北西側で見つかった外周濠は、内周濠から4.5m外側に位置しており、検出できた長さが8m、底部付近の幅が1.5~1.8mである。なお、外周濠が墳丘を全周していたのか、今回の調査地付近に限定して設けられていたのかは不明である。また、外周濠の本来の規模やその外側にいわゆる周堤帯があったかどうか、南北朝時代以降の削平により判別できない。

金津山古墳の築造年代については、内周濠から出土した埴輪と須恵器の様相から、5世紀後半に位置づけられている〔森岡1990・1995〕。埴輪と共存する須恵器は、幸いなことに、第2地点の発掘調査で前方部内周濠の底面直上で陶器 TK23型式を上限とする須恵器杯などが検出されており、IV期前半の円筒埴輪とは時期的な触れ合いを見せている。

ところで、阪神間の周辺古墳で円丘部規模が比較的金津山古墳に近似する古墳を挙げると、猪名野古墳群を構成する伊丹市所在の御願塚古墳と柏木古墳があり、幸いこれら2古墳については築造時期を確認付ける埴輪資料を有しているため、比較検討に耐え得る。御願塚古墳は、近年公刊された報告書によると、全長52m、後円部径39m、後円部高7m、前方部長13m、前方部前幅19m、前方部高2mで、後円部は二段築成で、造出しを有する。築造年代については、後円部や造出しに樹立していた円筒埴輪の形態や調整と、外周濠から出土し、前方部正面堤上に置かれていたと推定される馬・馬子埴輪の存在から、5世紀の第3四半世紀の年代観が与えられている〔中野・小長谷・瀬川2008〕。金津山古墳の円筒埴輪と御願塚古墳の円筒埴輪を比べると、土師質焼成の比率、厚み、ハケ調整、突帯の形態(幅や断面形、シャープ度)等から、金津山古墳の埴輪が5世紀第3四半世紀の範疇において先行すると言えよう。御願塚古墳の埴輪の突帯などに属性的様相に近いのはむしろ打出小槌古墳の方と考えられる。

一方、猪名野古墳群の5世紀代の古墳で御願塚古墳に先行するものとして、御願塚古墳から南約50mに位置する柏木古墳がある〔柏原1999、中野2008〕。柏木古墳は直径約55m、高さ5m程度の円形の墳丘が確認されており、円丘部の周囲には幅11mの周濠が巡っている。この柏木古墳の周濠から出土した埴輪は、土師質焼成のものが圧倒的に多い。これらはやや薄手で、突帯は細くて突出度が高く、その断面が台形もしくは上面がせり出すものが多いと言った特徴があり、金津山古墳の埴輪より古式の傾向が看取できる。つまり、御願塚古墳と柏木古墳の年代観を引き合いに出すならば、金津山古墳のおおよ

その築造年代は、5世紀第3四半世紀でも若干古い位置を占めるということになろうか。しかし、共存した須恵器がTK23型式期に相当しており、近年の須恵器の年代観に則れば、5世紀の第3・4四半世紀境頃に下降することも許されよう。

ここで改めて、御願塚古墳・金津山古墳・打出小槌古墳の埴輪を比較、概観すると、御願塚古墳は、西摂平野の5世紀代の諸古墳の中で、異質な円筒埴輪群を構成する。底部径が30cmを超え、口縁部平均径が35cmを測る大型品が主体を占め、6条突帯7段構成品や7条突帯8段構成品などきわめてイレギュラーな突帯・段構成の大型円筒埴輪を採用している。突帯条数と段構成からみれば、古市古墳群の応神陵古墳・允恭陵古墳段階の7条突帯8段構成、仲哀陵古墳の8条突帯9段構成資料など大王陵の保有する動きとの関連も指摘できる。重要なことは、前方部規制を受けた帆立貝形古墳が個別要素のいくつかでグレードアップを図っている点であり、より上位の階層に位置する同時期古墳を見ないこの2つのグループでは、盟主墳自体の墳丘長を抑制しつつも、政権中枢と直接的な支配関係を表出した地域把握をしばし先鋭的に行っている時期ととらえることができる。畿内内部にあって、大和・河内といった中枢部の直近に位置する摂津西部は、瀬戸内海域の交通支配や中・四国地方を含む西国との政治的交渉が経過している倭の五王の時代だけに、統轄方式自体が変則的な展開を見せたのであろう。

ただし、後出の打出小槌古墳の円筒埴輪は、金津山古墳所用の4条突帯5段構成品という本地域の新しい要素を持った埴輪をそのまま踏襲するものではない。それは器高や器径の数値を上昇させつつも、中期型の3条突帯4段構成パターンを普遍的に採用するものであり、一次タテハケ主流、二次B種ヨコハケ混融の調整手法からも明らかに製作技法体系の系譜を異にしており、埴輪製作工人も全く別格の集団が採用されたと考えてよい。これは要するに、芦屋グループの盟主首長層の抱える埴輪製作工人層の系列が大きく変質したことと、それにも関わらず畿内政権との強固な関係は少なくとも2代にわたり存続させるものであったことを如実に反映していると言えよう。

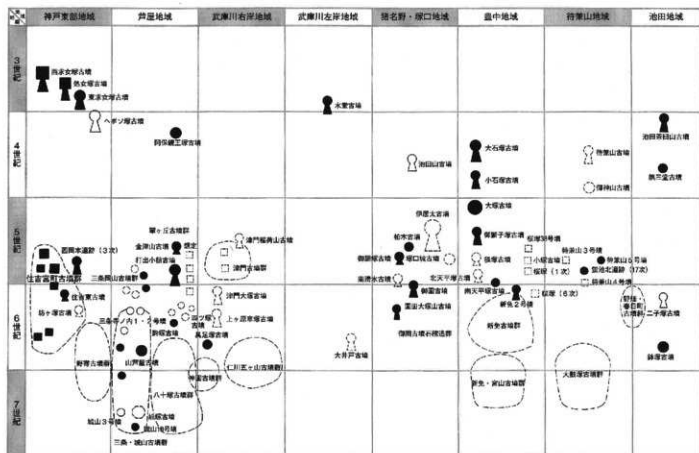
金津山古墳出土の円筒埴輪は、全形を推測し得る資料から、4条突帯5段構成のものを原則とする。そして、一瀬が細分してきたB種ヨコハケの内訳では〔一瀬1988〕、Bc・Bd種が目立つものの、Bb種やBa種の変則型も含むようであり、器面調整は多様である。突帯間隔は最上段のみ9～12cmの長い数値が認められるものの、通常段は7～8cmの間に収まり、器高が間延びしない分、突帯間距離は全体的に圧縮される傾向にある。一般的に埴輪の生産体制はミクロ的には一墳ごとの一過性の動きと考えがちであるが、今日の諸研究の進展を咀嚼するならば、古墳時代中期から後期にかけて畿内中枢の生産体制の影響が大量に使用・消費する円筒埴輪の生産にも波状的に現れ、直接的な要素として導入されている実態を知る〔高橋1994、清家2001、寺前2001〕。西摂地域では、中期―3条突帯4段構成の円筒埴輪の規格品、後期―4条突帯5段構成の規格品と、法量なども含めて統一化が目指されていることは一つのケースとして容認されており、猪名川流域を中心とする西摂のみならず、乙訓や南山城といった地域も同然の動きが確認されている〔東影2008〕。その歴史的背景としては、昨今、古墳を築造した被葬者の系列、首長系譜の変動や断絶など〔都出1988、福永1999〕との強い関連が主張されるに至っており、後期初頭における技術導入を超えた次元での埴輪生産の変革が行われたと考えられている〔東影2008〕。具体的には、TK23～47型式期におけるV群円筒埴輪の出現を支えた埴輪生産組織の再編成の想定〔高橋1994〕、MT15型式期に入ってからその再編活動の達成〔藤井2003〕などの変革と刷新であり、実年代では中期末～後期初頭における古墳時代の政治動向と深く絡むと思われる。

以上の点を踏まえて金津山古墳樹立埴輪の特性を再検証すれば、先に取り上げた4条突帯5段構成の

円筒埴輪の5世紀代における先取的な採用が特筆される。これまで考えられてきた西摂地域における中期→後期への一貫した一元的な円筒埴輪供給体制の枠組みを唯一先駆的に突き崩す動向であり、後期要素の早い時期における先取性は、今回初めて見つかった二重周濠の存在と共に、畿内政権中枢と直結した古墳造営集団の存在を新たに浮き彫りにしている。さらに付け加えるなら、帆立貝形という前方部規制の埴丘形態を呈しながら、金津山古墳は円丘部の立面構造を三段築成とするグレードを依然保っていることも指摘でき〔森岡1990、森岡・和田・後神1990〕、一世代においてこの地域最大級の前方後円墳である打出小槌古墳を後継せしむる点も看過し得ない。第2節でさらに深化させるが、金津山古墳や打出小槌古墳を盟主とする翠ヶ丘古墳群＝首長系諸芦屋グループのもつ潜在的リーダーシップの様相は、六甲山地南面の東神戸＝芦屋地域のみならず、より広範な地域圏（西摂全体）で突出する存在として再評価してこそ、当地域の古墳時代社会像の組み立てや解釈、文献資料との照合わせなど円滑化に近づくことになるのである。

(白谷・森岡)

第1表 西摂平野における主要首長墳・群集墳編年略表



【凡例】

- 前方後円墳 ● 時期未定 ○ 時期未定
 前方後方墳 ● 時期未定 ○ 時期未定
 帆立貝形古墳 ● 時期未定 ○ 時期未定
 円墳 ● 時期未定 ○ 時期未定
 方墳 ● 時期未定 ○ 時期未定
 多角形墳 ● 時期未定 ○ 時期未定
 群集墳 ○ 時期未定 ○ 時期未定

- この古墳分布表は、その所在地が確認・決定される西摂地域平野・丘陵部の古墳を対象としたものである。ただし、東播磨内瀬戸内海沿岸の古墳については、北摂郡にあるということで、そのすべてを対象とした。
- 古墳は、前方後円墳・前方後方墳・帆立貝形古墳・円墳・方墳・多角形墳などの種類と築造時期についても、考定・推定など区別を行った。
- データベースとして集めた編年表〔紀田1992〕〔森岡・山村1992〕〔森岡・田中1990〕〔森岡・新田1987〕〔森岡・村川1990〕〔高家2000〕〔宇野2000〕〔東野2000〕〔高田1986〕などを参考とし、各調査機関の見解と意見を加えて部分的に修正・改定を行った。

第2節 二重周濠の歴史的意義

はじめに 金津山古墳は、平成元年度に前方部において実施された面的調査（第2地点）以来、たえず周濠外域における付属施設が存在が予測されてきた。今般行われた事前調査において、二重目の周濠の一部とみられる遺構が痕跡のながら検出されるに至り、たび重ねてのその予想は図らずも的中した。残存遺構そのものは見かけ上小規模であるが、その検証意義はきわめて大きく、以下では、その特徴・機能・性格・類型や古墳時代史上の歴史的評価について、全国的視野からあらためて検証し、課題と展望のいくつかについても触れておきたい。

形態的特徴の二、三 二重目の濠の態様は、第3章第4節遺構の報告どおり、現存幅1.5～1.8m、残存深度0.1～0.3mを測る底部のみが遺存したものであり、全体構造に関しては、不詳な点が多い。注目度の割には見てくれの悪い遺構である。堆積初期から形成された水成層の存在から、結果として水堀の様相を呈するが、水を流すことを当初から目的にしたか否かは定かでない。ただし、保水能力はある。現状の埋没深度とは裏腹に上部構造の多くを後世の削平によって既に失っていることからすれば、内側の周濠のごとく、墳丘を完周していたものかどうかとも判断しづらい現状である。濠底の最深部が内側寄りにあるのか、外側寄りにあるのかは、その特性を考える上で証左が乏しいながらも留意点となるが、本例においては調査区南端部に限り内側寄りに僅かにポットホール状の浅い落ちが看取できた。したがって、造作とも関わる二段掘りなどの有無も材料不足で検討がなし得ない。

機能的検討 周濠が二重になっている部分があるからといって、内・外の周濠が同質の機能を保持したものとみなすのは早計である。それは両者のもつ幅や深さの計測値に大きな隔たりがある例や濠内の堆積環境や中堤・外堤との関係、さらには断面形態など、見聞したのものには、みるからに異なった要素や属性が見い出される事例が多いからに他ならない。

この点の検討の拠り所は先行研究においてもいくつか先鞭がつけられており、総じて①墓域の拡大化、②墓域の荘厳化、③墓域の隔離化、④用排水機能、⑤周外区画溝、⑥墳丘盛土の採土対象の充足、⑦被葬者身分の表示、⑧周濠形態の地域性などの、個別的事由や機能が広く共有する定式化、目的化の観点として多くの研究者により提示されている。

①～③は相互に関連するが、古墳が墳丘長以外に周外の区画施設を含めた景観総体としての総長の枠組でとらえるべき存在であることを示唆する。どこまでが一つの古墳であるかの本源的な議論に係る話であり、埋蔵文化財保護区域の設定とも深く絡む。④と⑤も連関する要素であるが、④の場合は自然流水や伏流水の認められる部分に限られた存在であることが多くなるし、周堤を画する機能面を重視した⑤は、全周を前提とした場合に類づける類推の一つではある。⑥は二重性を主張する上にはかなり消極的な意義付けであり、古墳の立地環境、基盤層と規模や墳丘構造（盛土工法、盛土量）とに深く絡む検討要素と考えられる。⑦については多くの研究史を負う問題であって、個別の検討と総論的な検討が今後も必要である。⑧は文化史的側面を加味するが、蓋然性は小さい。

二重周濠を有する古墳の現状 現在、日本列島には5,300基近い前方後円墳が存在する。これは約165,000基存在する国内の古墳の3.2%にすぎないが、二重周濠が認められる前方後円墳は、近年、独立要素を意識して「小方部墳」[沼澤2006]とも呼ばれる帆立貝形を含めても列島全域で120基程にすぎず、前方後円墳の2.26%しかなく、さらに僅少な存在である。畿内を離れると、西日本においても周濠を備

えること自体が異例な存在であり、また、保有する古墳であっても、深部の埋没環境や劣悪な開発環境にあってその存在を立証することは容易なことではない。むしろ、絶対数が少ない背景には、様々な要因の未確認割合がかなり見込まれることもその一斑をなしているものとみなすべきであり、市街化の進んだこの金津山古墳も例にもれない存在であった。

兵庫県下の事例とその周辺 兵庫県下では、その多くが畿外になることも相俟って、二重周濠をもつ古墳の実例はきわめて乏しい。確例としてあげられるのは、御願塚古墳（伊丹市）、野々池7号墳（三木市）、五色塚古墳（神戸市）、玉丘古墳（加西市）、ジャマ古墳（加西市）、雲部車塚古墳（篠山市）の6基にこの金津山古墳が加わる程度である（第2表）。その中には周堤帯の広大さからの推測や条溝状の部分発掘実例も含まれており、決して完周が裏付けられているわけではない。

二重周濠採用古墳にみられる特質と採用のプロセス 前述のとおり、稀少な存在であることは周知される特質の第一であるが、該当墳を通観して言える二点目の特徴は、隔絶した規模を誇る大王墓に意識的な採用が認められることであろう。大王墓導入の原則は、中期を中心に巨大な前方後円墳で占められ、二重周濠古墳の約50%が80m以上の前方後円墳であることをもって、墳丘長相対の上位墳と強い相関をみせる点が補足されるべき大きな特質であることを強く教える。したがって、その分布構造は、畿内王権中核と不可分な形を採って現れ、西・東に有意な伝播現象をトレースすることができる。約言すれば、中期初めから中頃までの間は、九州や関東の遠隔地への伝わりをみせる〔女狭穂塚古墳（宮崎県）、浅間山古墳（群馬県）、太田天神山古墳（群馬県）〕。続いて中期後半を迎えると、畿内の巨大前方後円墳に勢い採用され、大王墓群にその系譜が定着し、一定の変遷を見出すことができる。二重周濠は、津堂城山古墳（5世紀初頭）を皮切りに、石津丘古墳（5世紀前半）、譽田御廟山古墳・百舌鳥御廟山古墳・大仙古墳（5世紀中頃）、土師ニサンザイ古墳・市野山古墳（5世紀後半）、岡ミサンザイ古墳（5世紀末）、今城塚古墳（6世紀前半）と畿内内部、とくに河内・和泉で長期継続し、先にあげた機能①～③を満たしつつ、一部に三重周濠さえ含む整美さを加えた発達過程を辿る。

王権膝下に入る畿内地域では、5世紀前半の他の採用墳は規制されたかのごとく認められない。周知のとおり、大和北部から河内・和泉へと大王墓の墓域は大きく変動するが、二重濠は河内・和泉・摂津で盛行し、内陸部の大和では抑制された感をまねがれない。この点も特質の一つとみなすべきであろう。

金津山古墳や御願塚古墳における採用 5世紀後半は、二重周濠が分布の上でも、規模の上でも拡散をとげる特徴的な時期として捉えることができる〔宇垣2006〕。日本列島の分布を追えば、西は中国・四国に広まり、東では美濃や信濃、上野など東山道地方で定着する。墳形自体にも特徴がうかがえ、青塚古墳（香川県）や御願塚古墳（伊丹市）などは帆立貝形古墳であり、40～50m規模の面からも金津山古墳は同類型に入るとして過誤はない。一方、この時期の円墳への採用も注意すべき現象である。

以上のように、金津山古墳の二重周濠は畿内王権との関係においても積極的な評価を必要とする段階での導入であり、在地の求心力もさることながら中央政治勢力と絡む他律的な所産とみて大過ない。要するに、古墳からうかがえる政治的要素を色濃くみせる属性の一つとして注目すべきものである。

墳形を超えた二重周濠の流布 墳形によらず二重周濠の平面プランをみた場合、前方後円墳に特徴的な楕形・馬蹄形・相似形以外に円形・卵形の丸系統、方形の角系統の大別二類が存在する。卓越する地域については、関東に相似形、馬蹄形、長方形、近畿や関東に楕形が目立ち〔榎本2007〕、さらに円形は円墳に採用され、方形は方墳に採用されており、周濠の二重形態は墳形を超えて広がりをみせている。

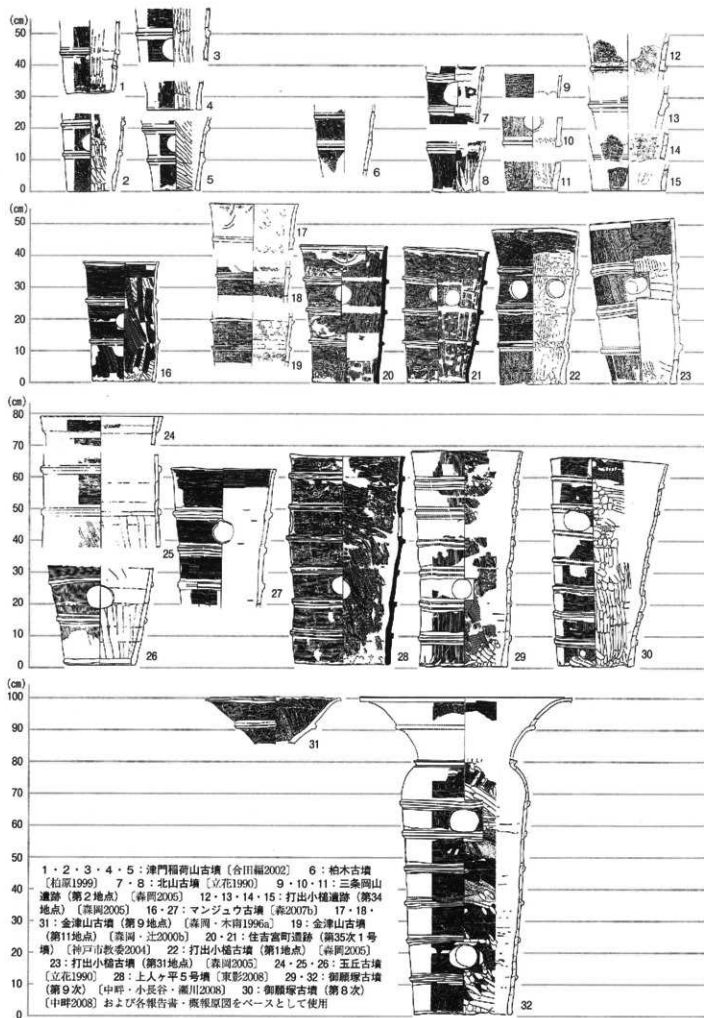
帆立貝形古墳と二重周濠 総数470基の帆立貝形前方後円墳中、20基近くに二重濠が存在することは

きわめて重要である。造出し付円墳とは異なって、帆立貝形の古墳が周濠系譜上も独立的なものでなく、墳丘形式として前方後円墳の仲間であること〔遊佐1988、榎本1984など〕の傍証を強化すること、さらに墳丘規模や形態の規制、造墓統制〔小野山1970、都出1992、沼澤2006〕、とくに前方部規制を受けた古墳があえて二重濠を許容されていること自体がグレードのバランスの崩れからも注意されるからである。帆立貝形古墳への採用は、近畿10基未満、関東もほぼ同数あり、東海・四国・山陽にもそれぞれ1～2基認められる。そして、その多くの内側周濠が整美な馬蹄形態を採ることも示唆的であり、その典型例とも言うべき兵庫県下の2例が阪神地域、西摂平野の東・西にやや離れて存在することの意味も改めて考える必要があろう。見てきたように、二重濠造営の下地や伝統が在地にないことは明白であり、本地域にあっては金津山古墳→御願塚古墳と築造の前後が推移する中で、固有の古墳群形成の系譜を超えた次元での一律的な定着を示している。前方後円墳への二重濠付設がその他の墳形に先行することも判っているので、前方後円墳における導入が全国的にみてはばないことから推量して、前方後円という最も階層序列の高い墳形の紐帯がこうした下位墳の外部施設の付加要素にきわめて根深く継承されている点が注目されるわけである。円・方墳への採用は全体としてかなり消極的であるが、大和や河内など畿内中心域でのその存在は、前方後円墳からの強い影響度を考える時、見逃せない。

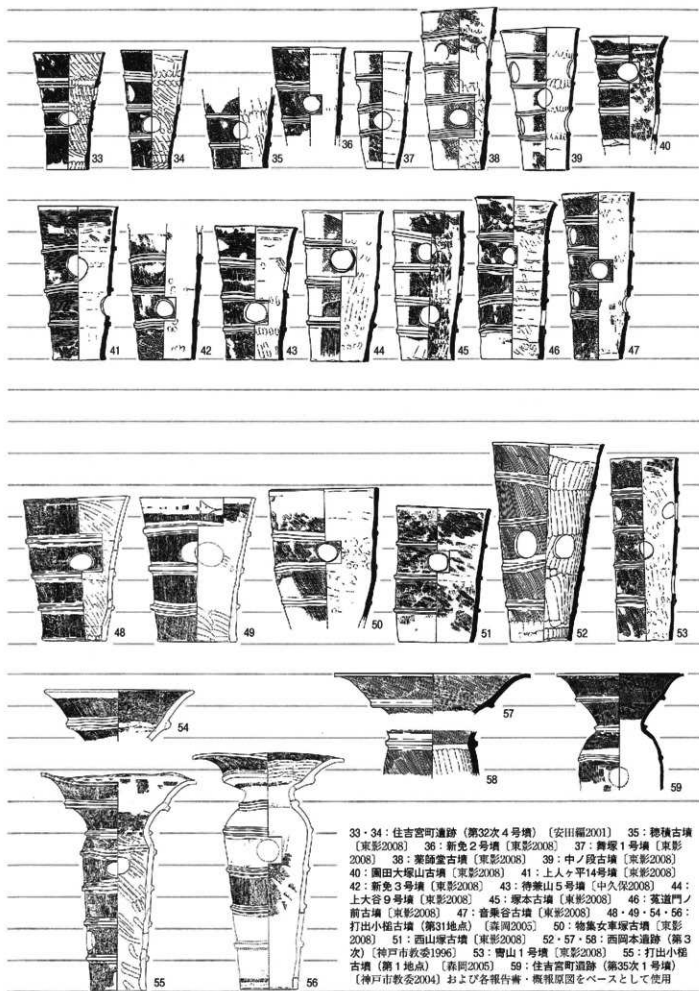
外部諸施設への注目度 50mを前後するような前方後円墳の場合、たとえそれが帆立貝形であるにせよ侮ることはできず、墳丘外部の埋没度の高い周辺施設への目配りを常々看過してはならない。この調査で私たち芦屋の調査チームも大変良い機会を得たわけであるが、調査箇所の不動の重要性をともすれば見過ごしていたことは、深く反省せねばなるまい。当初から存在を前提とした全面調査に向かうことができなかった点は、調査組織全体として体験的に墳丘外域の諸種の遺構の存在意識とこれまで学界で進捗してきた調査・研究状況の水準や問題意識を共有できていなかったことが最大の原因と思われる、将来への留意を含め互いに猛省が促されよう。

内外周濠の格差と異質性 さて、内外の二重濠を瞥見してみると、その断面形態・幅・深さなどにかなり異質な点が認められることに気づく。通常、両者の規模や大きさの違い、墳丘表飾のグレードの違いは最大頂点墳である大仙古墳（仁徳陵古墳）からみられ、内濠＞外濠の関係性がつとに明瞭である。したがって、二重目の濠を「外周溝」という用語で呼んだり、「区画溝」と呼称して、濠機能よりも溝機能に力点を移して総括する場合がまみられる。個別報告でも、五色塚古墳の「後円部周濠に沿って巡る溝」〔神戸市教委1987〕、などと表現されている。こうした歴然とした格差のある内外周濠の認められる事例は、見聞したものだけでも十指を満たすことができ、例えば五色塚古墳（兵庫県）・大仙古墳（大阪府）・土師ニサンザイ古墳（大阪府）・百舌鳥御廟山古墳（大阪府）・市庭古墳（奈良県）・ウワナベ古墳（奈良県）・内裏塚古墳（千葉県）・二子塚古墳（群馬県）・月岡古墳（福岡県）など、北部九州から北関東に至るまで、明証だった事例をあげることが可能である。

二重濠採用と総長の変化 二重濠の存在や中堤・外堤など周辺諸施設を総体でとらえた時、墳丘長とは異なる古墳総長としての認識は甚だ重要である。一つには墳丘規模の相互比較から除外されるケースが多いこと、事例の少ない外堤幅想定の問題や修陵時の諸堤の大規模後補など、比較論への障壁も少なくない。この点を乗り越えて比較研究を行い、最大の特徴として墳丘長と総長とが必ずしも比例、相関関係にないことも具体的に明らかになっており〔宇垣2006〕、津堂城山古墳（大阪府藤井寺市）や田出井山古墳（大阪府堺市）のごとく、（総長）＞（墳丘長×2倍）の数値関係を示すものさえ存在し、リンク付けの中での指標としての安定感を欠く。墳丘のみが大きいことだけでは割り切れない側面をもつ



第21図 金津山古墳関連遺構実測図（1/12）



33・34：住吉宮町道跡（第32次4号墳）〔安田福2001〕 35：穂積古墳
〔東影2008〕 36：新免2号墳〔東影2008〕 37：舞塚1号墳〔東影
2008〕 38：寒師堂古墳〔東影2008〕 39：中ノ段古墳〔東影2008〕
40：園田大塚山古墳〔東影2008〕 41：上人ヶ平14号墳〔東影2008〕
42：新免3号墳〔東影2008〕 43：待兼山5号墳〔中久保2008〕 44：
上大谷9号墳〔東影2008〕 45：塚本古墳〔東影2008〕 46：菟道門ノ
前古墳〔東影2008〕 47：倉桑谷古墳〔東影2008〕 48・49・54・56：
打出小槌古墳（第31地点）〔森岡2005〕 50：物集女車塚古墳〔東影
2008〕 51：西山塚古墳〔東影2008〕 52・57・58：西岡本道跡（第3
次）〔神戸市教委1996〕 53：青山1号墳〔東影2008〕 55：打出小槌
古墳（第1地点）〔森岡2005〕 59：住吉宮町道跡（第35次1号墳）
〔神戸市教委2004〕および各報告書・概報原図をベースとして使用

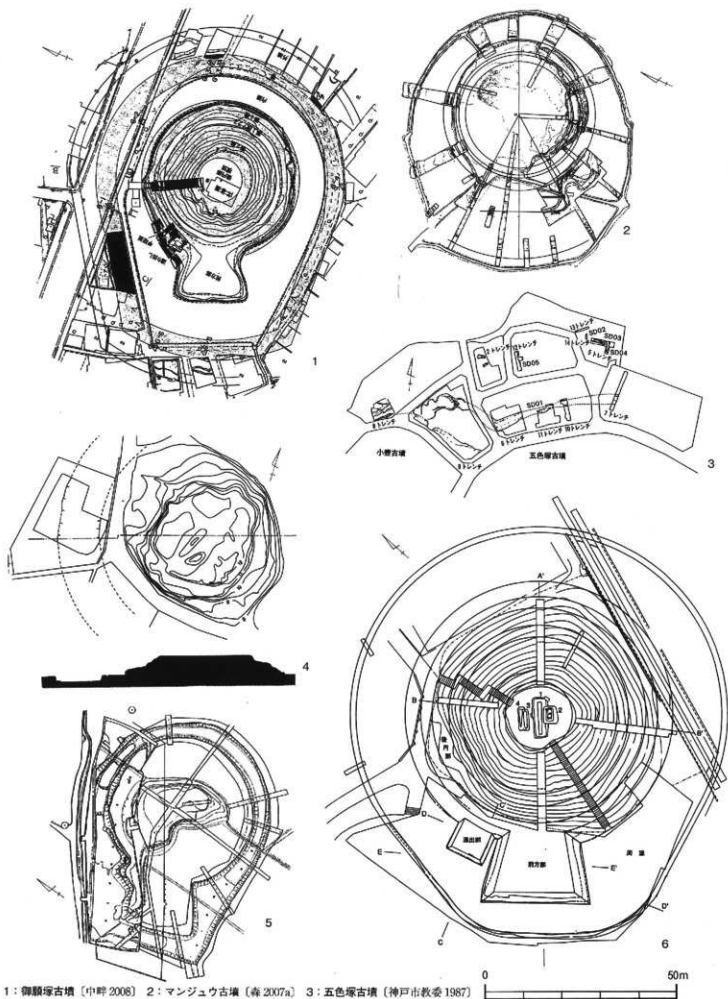
ことを教えており、景観要素を包括した別次元での序列規定や畿内中央政権との親縁性が表出しているようである。そのことは、[宇垣2006]が強調しているように、総長上位墳の大部分が二重周濠を保有することでも明らかであろう。三大巨大墳である大仙・誉田御廟山・石津丘古墳の総長がそれぞれ800m前後、700m前後、600m前後を測ることはそのことを端的に示しており、畿内政権中枢の大型大王墓に可視的に追隨する証しの一つが二重周濠であることを明確に物語っている。また、総長巨大墳が百舌鳥・古市・佐紀盾列・馬見など河内・大和の有数の古墳群を中心として、吉備地域（造山・作山・両宮山古墳）と上野地域（太田天神山古墳・浅間山古墳）には限られる現象や相似墳同士の連関も興味深く、東西の二大地域政権の台頭とも連動した状況が注目できる。

ここで金津山古墳のような規制墳の総長を推定することは本筋ではないが、このたびの調査成果から、約80m程は見積ることも可能で、当地方の古墳を再度、総長観導入の視点から比較検討すべき指針だけは得られたように思う。

二重周濠を有する金津山古墳と首長系譜の頂点に立つ打出小槌古墳 二重目の濠の存在が明確となった金津山古墳（墳丘長55m）の次期の盟主首長墳は、言うまでもなく打出小槌古墳（墳丘長80m前後）である[森岡・辻2000a・2006a、白谷2008]。この2基の首長墳の築造時期差は、埴輪群の様態差からみて、実年代にして20～30年程度であろう。換言すれば、金津山古墳→打出小槌古墳の前後の年代差の関係は一世代程のものであり、系譜的連続性は金津山古墳を経て打出小槌古墳築造の5世紀末へと継承される。この間、周辺域では埴輪や須恵器、葺石をもつ小古墳が散在していたようで、その一部が既往の調査で姿を現わし始めている[森岡・辻2002、森岡・坂田編2005、森岡・竹村・白谷2008]。それらが断絶するのは6世紀に入ってからであり、打出小槌古墳の築造は一つの時代を古墳群全体として終えるという点からも画期をなす存在である。

雄略朝期造営の打出小槌古墳は、後述するように、他の築造首長系譜の目立った衰退期に西摂地域最大の規模と墳形を誇示する形で登場しており、やはり畿内王権との政治連動の過程で勢い成長した被葬者の存在が容易に想定できる[森岡2002a・2008b]。本墳の被葬者は、凡河内直香賜という有力氏族の特定人物が推定され、領域拡大氏族の西摂支配を背景とした歴史的位相の上に立つての帰結的な築造と考えられる[森岡2002a]。この古墳の優勢な側面は各所に散見されるが、九州系磁石を原料とする緑彩の器財埴輪の存在や九州的な巴形透しをもつ靱形埴輪の遺存[橋口2004]、海神を祀る北部九州沖ノ島胸方神との触れ合いをもつ凡河内直香賜（雄略9年2月条）が被葬者像として描かれることと海に面した前方後円墳であることなど、それぞれが互いに関連を強めている点は見逃せない[森岡2002a・2007]。5世紀の最末期から6世紀初めという時期は、西摂地域全体にあって改めて検証し直すべき肝要な画期といえ、さらに次項以下にて分析の常歩を進める。

西摂地域における首長系譜群の消長と芦屋グループの存在意義 兵庫県南東部の一画を占める西摂平野では、古墳群として認識されてきたが、近年の研究で累代的な盟主墳の存在により首長系譜として掌握できるものがいくつも含まれていることが明らかになってきた。これまでに触れてきた、阿保親王塚古墳を後継する金津山古墳→打出小槌古墳の築造系譜は、翠ヶ丘台地上に展開する芦屋グループとしてこれまで扱ってきたが[森岡1990・1995・2008b、森岡・田中1990、森岡・藤田1987、森岡・吉村1992]、2008年段階までに新たに加わった事実を改めて列挙、検討すると、①打出小槌古墳の墳丘長が80m前後の前方後円墳になることが判明、追認[森岡・辻2000a・2006a、白谷2008]、②金津山古墳が二重周濠をもつことが判明[芦屋市教委2008a、本書]、③周溝や葺石、埴輪の一部をもつ小古墳の存在が浮上



第22図 金津山古墳関連古墳平面図 (1/1000)

〔森岡・辻2002、森岡・坂田編2005、森岡・竹村・白谷2008〕、と顕著な動態変化がうかがわれる。と共に、西摂地域その他のグループとの種々の比較条件が次第に整備されてきたと言える。

さて、西摂平野における古墳・古墳群の消長については、これまで多くの地方史に依拠するところが多いが〔芦屋市1971・1976、西宮市1959、宝塚市1975・1976、伊丹市1966・1968、尼崎市1966・1980、池田市1997、豊中市2005〕、グループの変動比較や古墳編年を総括した仕事もまみられる〔森岡1990、森岡・藤田1987、森岡・吉村1992、森岡・村川1996、福永1999、清家2001、寺前2001など〕。ここでは、これら既往の諸研究をも吸収しつつ、芦屋グループの動向にみられる際立った特徴を探るためにあえて瞥見し、全体像の位置付けを行っていききたい（第1表）。

まず芦屋グループの東方であるが、西宮市域を中心に武庫川右岸グループ（津門稲荷山古墳→津門大塚古墳→上ヶ原塚古墳）が存在する。分布の密度からはきわめて緊結度の弱いグループとなるが、5世紀中頃から6世紀前半への盟主的古墳の消長が前方後円墳の築造の系譜としてかろうじてたどれる。また、近年の調査で、前方後円墳の存在以外に、周囲に埋没小古墳（津門古墳群）の存在も予想されるようになった〔合田編2002、合田2008〕。芦屋グループの動きと重なりつつも、6世紀に比重を置く点やや異なるが、翠ヶ丘丘陵北辺高所の駒塚古墳（6世紀前半）〔勇・藤岡1976、古川1976〕を付随的にとり込めば、芦屋グループの横穴式石室単独墳への移行が、武庫グループ同様に連続的にたどれそうな気配である。

伊丹・尼崎両市にまたがる猪名野・塚口古墳群は従来から同一グループ視される場合が多く、小稿においてもあえて一括する（第1表）。不分明ながら内行花文鏡などを出土池田山古墳を前期段階としてとらえれば、前期から後期にかけて長期継続型の首長系譜が把握できる。具体的には、池田山古墳→柏木古墳→（伊居太古墳）→御願塚古墳→御園古墳→南清水古墳→園田大塚山古墳→御園古墳石棺追葬の推移であり、墳丘長40～60mクラスの前方後円墳や帆立貝形古墳が数多く続く中、90m前後が想定される伊居太古墳（5世紀末、前方後円墳）の位置付け〔尼崎市1966・1980〕に関心が寄せられる。ただし、この古墳については尼崎市教育委員会によるその後の度重なる調査により、墳形・時期・規模ともに確定付けの要素を欠いており、全体として系譜に占める諸要素に多くの疑問がみられるようである。よって、ここでは系譜中から削除すべきことにも留意しておきたい。

西摂平野の東端、猪名川水系には丘陵上を3～4の古墳群が有意な関係でとらえられ、近年発見されるようになった小古墳を包括しての整合的なグループ設定もなされている〔福永1999、清家2001、寺前2001〕。豊中市域の中・低位段丘から成る台地面には、かつて40数基の存在が認められたという桜塚古墳群があり、西部域の前期古墳（大石塚古墳→小石塚古墳）の流れは、スムーズに東部域の中期古墳群へと接続する。具体的には、豊中市大塚古墳（5世紀前半）→御獅子塚古墳（5世紀中頃）→狐塚古墳（5世紀後半）→北天平塚古墳（5世紀末）→南天平塚古墳（5世紀末）の動態の過程で、桜塚38号墳・小塚古墳・桜塚1次調査・同6次調査の小方墳が5世紀中頃から6世紀初頭にかけて営まれるようである。5世紀の中で墳丘規模を著しく減少させながら衰退の動きをたどることが大きな特色と言える。猪名川分流の千里川・箕面川間に伸びる待兼山丘陵上には、前期後半段階、待兼山古墳・御神山古墳があり、前者から後者に向けて、前方後円墳→円墳への盟主首長墳の弱勢化をみせる。そして、中期前半には全く衰微したかのように、古墳の空白時期を挟み、5世紀後半～6世紀初頭にかけて、待兼山3・4・5号墳、堂池北遺跡17次調査などの小方墳や小円墳のみから成るグループ構造として再興するも、大型古墳はこの期には全く認められない〔清家2001、寺前2001、東影2008〕。

猪名川と箕面川に挟まれた池田グループも丘陵上に有望な前期古墳の築造から盟主首長系譜を出発させる。前期中頃以降に池田茶臼山古墳→銀三堂古墳の築造序列、墳形による格付けの変化があり、前方後円墳→円墳への変動は、南方の待兼山グループと近似した動態、進行過程を辿る。後期、6世紀前半の二子塚古墳や鉢塚古墳に至るまで、長期間築造断絶の時期を有する点は待兼山グループとの小異であり、在地勢力が中期の全体を通してきわめて弱体化、縮小化することを教えていよう。

以上、西摂平野に展開する前・中期古墳の群構造と消長を設定グループごとに大観してきたが、全体の約言できることは、以下のごとくなる。

①古墳時代中期初頭の変動は各グループにほぼ共通してみられるが、中期前半の築造墳を欠くか、系譜の出発をみない数グループに対して、豊中台地を占める豊中グループのみは、大塚古墳（円墳）に変化するものの墳丘巨大化をひとり達成し、中期の前半期の内御薊子塚古墳を築いて盟主墳は継続する。このグループは、前期以来200年間近く首尾一貫して古墳造営を続けているが、百舌鳥・古市古墳群などを擁する河内畿内政権の直接支配を超えて直轄地に値する軍事要衝地域とみなされる点、畿内という枠組の内でのその消長と共に運動している様子がうかがえる。

②中期中頃から後期初頭にかけては、武庫川左岸・池田グループを除いて、方墳を中心とする小規模墳の築造が活発化する。未だ資料は乏しいものの、各グループに数基の構成墳があり、前方後円墳や大型円墳とはまた異なった階層の古墳造営権の進捗がうかがえるのである。こうした状況は今後、確認例のないグループにも波及する公算が大きく、盟主墳の連続性のみで系譜性の検証を行うことを躊躇させる。この時期には方墳主体の大規模古墳群が摂津（住吉宮町古墳群・総持寺古墳群など）、河内（長原古墳群など）などに認められ、これらとも十分運動する各地の小古墳のあり方、とくに墳形には注意が必要である。これらの群集形態を採る小方墳群などは、渡来者集団をも含めて王権の統制と再編が直接及び形で墳丘形式や規格、被葬者の身分秩序が偏ったすこぶる定式化の進んだ所産と考えたい。

③確例墳として5世紀末前後に築造される80m規模の前方後円墳は、各グループに均質的には存在せず、唯一芦屋グループにのみ最大墳丘長を誇示して出現する。この時期は、西日本を中心に全国的に古墳の造営系譜は多くの地域で途切れ、断絶し、大型古墳が地域単位で大幅に減少する時期とオーバーラップする。畿内中枢の大王権の強化・伸長期とも言え、小地域ごとの最大盟主墳は選択され、輩出の首長系譜も限られた存在となる。大王墓を頂点とする畿内政権に直結する首長たちの系統化が盟主墳を絞り込む作用によってより進んだ結果であり、一時的にせよ、西摂地域も河内からの領域拡大勢力の浸透によって支配一元化の政治的背景を担い、その動きが貫徹されたわけである。

西摂地域の基盤階層が畿内直属に再編されていく過程とは別に、西日本における5世紀後半の帆立貝形古墳築造の政治動向として、朝鮮半島への軍事的侵攻を想定する向きや軍事行動を担った人々の活動との見方は少なくない（檀本1984、古瀬1992、古瀬・葛原1996、沼澤2006）。実際、武器・武具の副葬保有をみる事例が既掘墳では多く存在し、この金津山古墳も埋葬施設に優秀なる甲冑が眠っている蓋然性は大きい。このたび二重濠という属性が新たに加わったことは、畿内王権の直属支配と軍事行動の政策差配がこの芦屋を基盤とする勢力に及んだことを証していると考えられる。

金津山古墳と「倭の五王」の時代 5世紀という時期は、古墳時代中期と深く関わりと共に、5人の倭王が合計10回、中国宋に遣使し、王権外交を対外に進展させた時代としてもよく知られている。いわゆる讃（421・425年）、珍（430・438年）、済（443・451・460年）、興（462年）、武（477・478年）の継続的な通交である。隣接する朝鮮半島の高句麗・百濟・新羅三国の王権は激しい争乱接触を行いつつ、

いずれも中国南北諸王朝に遣使し、大国の権威や保障を得るために冊封を受けることに努めており、列島倭政権の入朝もかような東アジアの激動する情勢と連動するものであった〔鈴木1988〕。

その結果、讃の「安東將軍・倭国王」をはじめとする官号爵位の要請、称号の授与だけでなく、朝鮮半島南部の軍事的支配権をも求めたのである。その具体的な動きは、古墳築造にうかがわれる被葬者に体现されており、近畿中樞部の倭の王権は、各地の首長層を直接・間接に掌握し、卓越した存在として政治的諸関係をとり結ぶ経緯をなした。その根幹とも言うべき軍事的編成の片鱗は、『日本書紀』の崇神紀以降皇極紀あたりまで多数散見される地方豪族の遣使や外征記事とも表裏一体の関係にあるが、465～490年頃までの雄略大王の王権下は、倭政権が連合的同盟的要素を脱して、他の地方勢力を制圧しての性格的転向を図り、対外的軍事組織編成の面でも、大きく画期をなした時期である。

その実態たるや古墳副葬品における甲冑保有の形態に反映されており、近年の研究によると、百舌鳥・古市古墳群被葬者集団が統括する畿内の中小規模墳の被葬者階層に至るまで最新相の武器・武具保有セットが浸透していたものとされ、旧勢力や新興勢力に対する牽制・懐柔策がうかがわれるという〔藤田2006〕。これは、古墳時代中期における畿内政権が政治的な地域支配の秩序を確立しようとする動きであり、この摂津西部の地域は5世紀後半にはその覇権が及んだ所として重要である。金津山古墳から打出小植古墳へと連なる被葬者の継承関係と畿内中樞の王権の政治的介入についてはなお不明な点が多いが、未掘である金津山古墳の後円部埋葬施設に副葬されているであろう甲冑などの保有形態などがそれらを決する素材になることは疑いないことである。

第2表 近畿圏主要二重濠・外周溝関連古墳一覧表

古墳名	所在地	築造時期	墳形	墳丘規模
本墳	兵庫県川西市	第4段階	帆立貝形古墳	55m
五色塚古墳	兵庫県神戸市	第1段階	前方後円墳	194m
玉丘古墳	兵庫県川西市	第3段階	前方後円墳	109m
ジヤマ古墳	兵庫県川西市	第3段階	帆立貝形古墳	53m
雲部車塚古墳	兵庫県川西市	第3段階	前方後円墳	140m
鉾塚古墳	兵庫県川西市	第4段階	前方後円墳	52m
野々池7号墳	兵庫県川西市	第6段階	前方後円墳	21m
宇治子塚古墳	京都府宇治市	第5段階	前方後円墳	112m
久津川草塚古墳	京都府城陽市	第3段階	前方後円墳	180m
山道東古墳	京都府城陽市	第4段階	円墳	27m
千歳車塚古墳	京都府亀岡市	第5段階	前方後円墳	81m
今城塚古墳（真の墓体陵）	大阪府高槻市	第6段階	前方後円墳	190m
太田茶臼山古墳（墓体陵）	大阪府茨木市	第4段階	前方後円墳	226m
岡ミナサザイ古墳（仲哀陵）	大阪府藤井寺市	第4～5段階	前方後円墳	242m
津城山古墳	大阪府藤井寺市	第1段階	前方後円墳	208m
市野山古墳（允恭陵）	大阪府藤井寺市	第4段階	前方後円墳	230m
舞田舞山古墳（志神陵）	大阪府羽曳野市	第3段階	前方後円墳	425m
兼ヶ塚古墳	大阪府羽曳野市	第5段階	前方後円墳	96m
白雲山古墳（清孝陵）	大阪府羽曳野市	第5段階	前方後円墳	119m
土師ミナサザイ古墳	大阪府堺市	第4段階	前方後円墳	290m
田出山山古墳（反正陵）	大阪府堺市	第4段階	前方後円墳	148m
大仙古墳（仁德陵）	大阪府堺市	第4段階	前方後円墳	486m
百舌鳥御陵山古墳	大阪府堺市	第3段階	前方後円墳	200m
石津丘古墳（履仲陵）	大阪府堺市	第2段階	前方後円墳	360m
淡輪ミナサザイ古墳	大阪府泉南郡堺町	第4段階	前方後円墳	180m
ウツナバ古墳	奈良県奈良市	第3段階	前方後円墳	255m
コナベ古墳	奈良県奈良市	第2段階	前方後円墳	210m
ヒシアゲ古墳（磐之媛陵）	奈良県奈良市	第4段階	前方後円墳	220m
市庭古墳	奈良県奈良市	第2段階	前方後円墳	253m
星塚2号墳	奈良県天理市	第6段階	帆立貝形古墳	41m
西奈阪古墳	奈良県天理市	第6段階	前方後円墳	118m
三河3号墳	奈良県磯城郡三宅町	第6段階	円墳	20m
御鉢山1号墳	奈良県磯城郡田原町	第5段階	前方後円墳	50m
木島原古墳	奈良県大和郡山	第6段階	帆立貝形古墳	50m
西条1号墳	奈良県磯城郡	第4段階	方墳	29m
河合山古墳	奈良県大和郡河合町	第4段階	前方後円墳	197m
車駕之古墳古墳	和歌山県和歌山市	第4段階	前方後円墳	86m
林ノ黒古墳	滋賀県彦根市	第5段階	前方後円墳	90m

多いが、未掘である金津山古墳の後円部埋葬施設に副葬されているであろう甲冑などの保有形態などがそれらを決する素材になることは疑いないことである。よって、将来、古墳の適切な保存と活用のためにも課題を据えた慎重な学術調査が計画されることを望むものである。（森岡）

＜凡例＞

- 所在地は市町名までにとどめた。築造時期は二重濠出現後の段階設定（導入第1～6段階）にとどめ、相対時期や実年代については意識的に表記していない。
- 墳形については、厳密を期していないものを含んでいる。墳丘規模については、墳丘全長、墳丘最大径、最大辺などを拠所としている。
- 表紙にあたって、〔宇垣2006〕〔坂本2007〕〔大塚・小林2008〕〔白石ほか2008〕〔堺市長公室文化財部文化財課2008〕他、各発掘調査報告・概観・現地説明会資料、調査機関・調査担当者への問い合わせを参照・統合した。

第3節 金津山古墳の二重周濠の保存について

第1章第1節で記したとおり、当該地は金津山古墳周濠の保存活用という目的で芦屋市土地開発公社に先行取得された経緯がある。しかし、今回、当初の取得目的とは異なる福祉施設建設が計画されたため、当該敷地に埋蔵される周濠（内周濠）の保存について、調査着手前から平成19年度の第1～3回芦屋市文化財保護審議会において審議された。さらに、本発掘調査において新たに検出された外周濠についても第4回・第5回の審議会に取り上げられ、出席委員からの現状保存しなければならないとする統一見解を受けて、本市教育委員会と事業担当課である本市保健福祉部障害福祉課と事業者の間で協議が重ねられた。その結果、最終的に二重の周濠を保存することが決定し、周濠を損壊しないように建物の設計変更が行われることとなった。

二重の周濠を保存する条件としては、掘削範囲・深度について、①周濠の両肩から1.5m以上離す、②掘削深度は現地表面から90cm未満とする、③内周濠と外周濠の間に基礎杭を打設する場合は周濠に影響を与えない工法で周濠から1.5m程度離す、④人力で垂直に掘削する、⑤掘削の際には終始文化財担当職員が立会する、という5点の条件で合意した。

その後、事業が進捗し、基礎掘削が行われる際に、先の合意に基づき、竹村が立ち会うこととなった。その期間は、平成20年（2008）7月15～18日で、立会開始の時点では、保存条件どおり、現地表面から90cmまでの土砂がすでに機械掘削によって除去されており、その後の深基礎掘削の掘削は、内周濠と外周濠のそれぞれの肩から150cmの幅を確保して、人力掘削によって進められた。

7月15日、人力掘削中に掘方の北部（敷地東辺中央付近）から暗黄色砂層が検出され、本発掘調査で確認されている外周濠の埋土に似ており、現地を訪れる機会があった白谷・坂田が検証した。その時点で二重周濠の埋土の可能性があると判断し、生涯学習課文化財担当へ報告した。7月16日、報告を受けて森岡・守田と白谷が現地検証し、二重周濠であった場合、対応できるように記録をとることとなった。7月17・18日に竹村と調査補助員須田佑子の2名で、平板を用いて平面図を縮尺1/10で実測し、土層断面図を縮尺1/20で実測した。しかし、人力で基礎部分を完掘し、土層観察を行った結果、先述した暗黄色砂層は基盤層であると認識するに至った。

基礎掘削が完了した時点で、その壁面すべての土層を慎重に観察したが、周濠埋土等はまったく確認されなかった。このことから、金津山古墳後円部北西側の二重周濠は、今回の工事によって損壊を受けなかったと判断され、合意された5つの条件を満たして、地下に埋没保存されたことが確認された。

遺跡を破壊することは一瞬にしてできるが、再生させることは絶対にできない。21世紀初頭である現在まで、千五百年以上もの悠長の時を凌いで残されてきた金津山古墳の二重周濠を、今回、多くの関係者の努力によって保存することができた。今回の保存によって、未来に残すことができた二重周濠を、我々の子孫が守り続けてくれることを切に望む。

（竹村）



第23図 深基礎掘削時の工事立会状況

- [illegible]

- [illegible]

写真図版

P L A T E



金津山古墳および周辺航空写真（1990年）
 ※上が北。写真中央に金津山古墳が、
 左上端に打出小槌古墳が位置する。
 金津山古墳前方部（第2地点）の
 調査の際に航空撮影したもので、
 ★を付したのが第17地点、●を付
 したのが打出小槌古墳の前方部周
 濠検出地点である。



調査地近景（北西から）



調査地全景（北から）



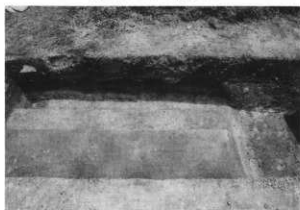
第1トレンチ（東から）



第2トレンチ（南から）



第3トレンチ（東から）



第5トレンチ（西から）



第6トレンチ（西から）



第7トレンチ周濠埋土（北西から）



第8トレンチ南壁土層断面（北から）



第7・8トレンチにおける周濠検出状況（北西から）



調査区全景（北から）

※外周濠は灰白色のシルト～粘土と褐色の砂で構成された大阪層群上面で検出された。左奥の樹木のかげに金津山古墳の後円部墳丘が位置している。



金津山古墳墳丘と検出した外周濠（西から）



調査区西壁（東から）



調査区南壁（北から）



調査区北壁東部（南から）



調査区東壁北部（西から）



調査区東壁北部検出の周濠埋土（西から）



外周濠検出状況（北北西から）



外周濠掘削状況（南から）



外周濠掘削状況（北北西から）



外周濠完掘状況（南から）



外周濠完掘状況（北北西から）



外周濠南部検出状況（東から）



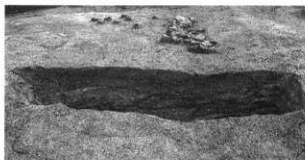
外周濠南部掘削状況（東から）



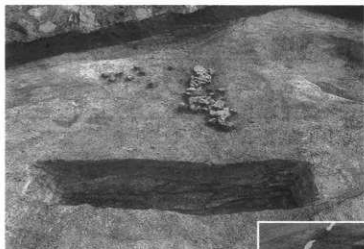
外周濠南部完掘状況（東から）



南壁における外周濠埋土（北から）



断割トレンチにおける外周濠埋土（北から）

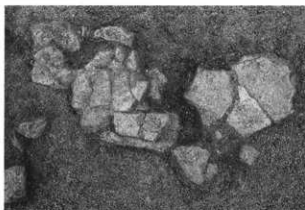


外周濠壇輪出土状況（北北東から）

外周濠壇輪出土状況（南南西から）



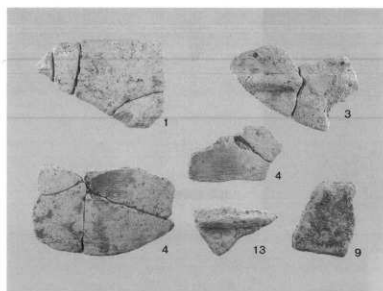
外周濠壇輪出土状況（西北西から）



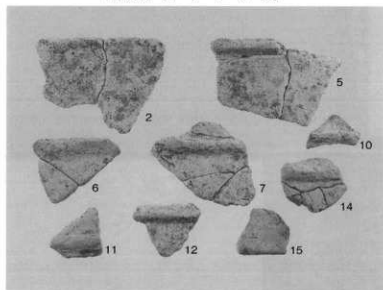
外周濠壇輪出土状況（部分）（手前が東）



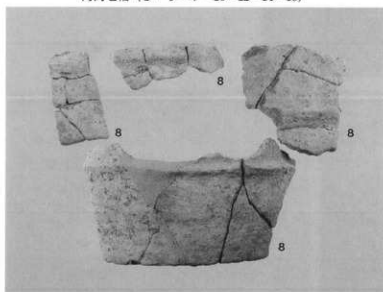
外周濠壇輪出土状況（部分）（手前が北東）



円筒埴輪 (1・3・4・9・13)



円筒埴輪 (2・5・7・10・12・14・15)



円筒埴輪 (8)



円筒埴輪内面部分 (1)



円筒埴輪外面部分 (4・9)

報告書抄録

[illegible]

- 表紙挿図** 平成元年度にヘリコプターを利用して空中測量した金津山古墳後円部の墳丘実測図と、その周辺の調査地点で検出した内周濠・外周濠の位置などを示した。馬蹄形の内周濠から約4.5m外側に、今回検出された外周濠が位置する。その底部残存幅は、1.5～1.8mである。
- 表紙写真** 第17地点から見た金津山古墳の後円部墳丘。黒松の緑が、海に近い立地であることを示している。この古墳の周辺に田畑が広がっていた時代の旅人の目にはどのように映ったのだろうか。
- 裏表紙写真** (左上) 第17地点の調査区と金津山古墳の後円部墳丘。調査区内には、埴輪を伴って外周濠が検出された。その奥、墳丘との間には、確認調査時に第7・8トレンチで確認した内周濠の西屑部の位置がわかるように白線で示した。この間に中堤が想定できる。
- (右上) 作業風景。埴輪の出土状況を示す図面を作成している。
- (右中) 埴輪の出土状況。灰褐色の外周濠埋土と、ややオレンジ色を帯びた埴輪の色が対照的である。埴輪の器面にはわずかに赤彩も残っていた。
- (右下) 作業風景。調査区内に溜まった雨水の排水作業。灰白色の大畧層群は水はけがきわめて悪いので、トレンチや遺構内に滞水した。
- (左下) 2008年1月22日に実施した現地見学会風景。時折小雨のばらつく冬空の下ではあったが、調査区をぐるりと取り囲んだ見学者は、千数百年前の外周濠の前にして太古の昔にしばし思いを馳せていた。

あ と が き

土中から発せられる先人達のメッセージは、すべて芦屋市民の文化的な財産です。最近では、地域が誇れるこうした宝を少しでも後世に伝えていきたいという思いが市民のみなさまから直接聞えてくる機会が増えました。

平成17年の徳川大阪城の石切場跡（岩園町）、平成18年の芦屋川水車場跡（山戸屋町）、平成19年の祖塚古墳（山戸屋町）、平成20年の金津山古墳（春日町）などがそれぞれ、その都度、本市の文化財保護審議会の委員の先生方には、足元の悪い発掘現場に足をお運び頂き、多大なご指導を頂きました。深く感謝申し上げます。（編者）

芦屋市文化財調査報告 第75集

金津山古墳発掘調査報告書

—第17地点で検出した外周濠の発掘調査成果—

平成20年（2008）12月24日 印刷発行

発行者 芦屋市教育委員会

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL. 0797-31-9066

編集者 芦屋市教育委員会 社会教育部生涯学習課（文化財担当）

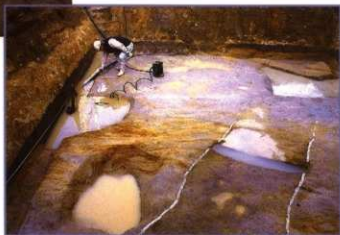
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL. 0797-31-9066

印刷所 有限会社 岸本出版印刷

〒652-0806 兵庫県神戸市兵庫区西柳原町3番地29

TEL. 078-681-2456 代



2008. 12

Ashiya City Board of Education, Japan